
超えてはいけない境界線

如月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超えてはいけない境界線

【Nコード】

N2332B

【作者名】

如月 雪

【あらすじ】

私青木瑞希あおきみずきは数学教師の九条光くじょうひかるに恋をした。不器用な女の子と、冷血漢の大人の恋。超えてはいけない禁断の境界線。好きなのに理性が邪魔をする。大人が境界線を越えたとき、そこに大人の女が生まれる。

第一話 中間考査

超えてはいけない境界線

甘く 切ない 思い

大人の私だから、君のことは……

第一話 中間考査

やっと、終わった

高校で最後の中間考査

やっと、受験に本腰を入れられる

うちの高校は、いわゆるミッション系の私立女子高校。

半分以上は、上に上がっていく。

友達も殆ど、ううん 全部 うえの大学に上がるはずだ。

私かというと、数少ない受験組！

一応、有名国立大学を目指している

・・・女子ばかりには もう うんざりなのだ・・・

今日も、数学のわからないところを 九条先生に聞きに行く
予定だ

九条 光 二十八歳 独身 男性 血液型はB型

銀縁の眼鏡がメチャクチャ似合っている、クールな冷血漢
女子独特の お誘いにも動じない 鉄壁の理性の持ち主だ
・・・そんな九条先生に 私は 恋をしている・・・

受験をするつもりになったのも、先生の影響だ

数3を取っている生徒は、数数えるほど・・・

そんな先生の側に 出来るだけいたかった・・・

コンコン 数学準備室のドアをノックする

「3Aの青木です。九条先生 入ってよろしいでしょうか

」?

「どうぞ。」乾いた低い声が した

先生は 狭い数学準備室の窓際においてある黒いソファア
座ってタバコを吸っていた

「おー青木か。水口先生から聞いている。補習だったな?
何もってきたんだ?」

私が 胸に抱いている問題集を見て 何の感動もなさそうな
口調で問い掛ける

「はい。Z会の問題集なんですけど・・・」

「お前、塾とかいつてんのか？」

「いいえ、通学に時間が掛かるので添削だけですけど。」

「そっか、理系を目指してるんだな？」

「はい。」

「ちなみに、何処目指してるんだ？ あっ言いたくなければ言
わなくいいぞ。」

先生が、珈琲のカップを二つ持って座りなおした。

「一応、K大を・・・」

「俺の母校だな。難しいぞ」

「はい。わかっています。」

先生に傾向と対策を聞いたら良いと水口先生に教えてい
ただきました。」

珈琲の入ったカップを一つ私に渡して、ソファアの隣に座るよ
うに催す。

ちよつとドキドキして、先生の横に腰掛ける。

コロンの匂いがした

どうしよう もう心臓が バクバクだ

「何処がわからないんだ？ん？」

先生の横顔がすぐ横にある

・・綺麗だな・・

「おい。聞いているのか？」九条先生の厳しい声が響いた

「すみません。聞いています。」

（そうだ、今はそんなことしている場合ではない。せつかく先生に教えていただいているのに・・）

窓の外は、もう真っ暗になっていた

「おっ。雨みたいだな。そろそろ帰るか」

「はい。ありがとうございました。」

貴重なお時間を裂いていただいて申し訳ありませんでした。
「

「はははは。お前 おかしいよな？ははははは。」

先生が、身体を曲げて笑っている。

（????）何かしたかな？

「なんで、そんな言葉使いするんだよ？いまどき・・それはないだろ？くっくっくっ」

なんだか笑いの坪に入ったみたいに、お腹を抱えて笑い転げている。

先生も 笑うんだな・・なんか可愛い・・

自分が 笑われているのも忘れて、笑っている先生に見とれていった。

ひとしきり笑った後、

「あー、笑いすぎて 腹減ったな。 青木、時間あるか？」

「はい。別に帰るだけですから・・・」

（あーどうしてももう少し気の利いた返事 出来ないんだろう？）

「じゃあ、一緒に飯食いにいこう。付き合え」

（ヤッター・・・）

学校は 何処もかしこも真っ暗だった

夜の学校って ホラー だよな

廊下を歩くだけで 後ろから 何か出てきそう

生徒玄関に靴を履き換えに言った時、稲光が バリバリバリ
と轟いた

「きゃー」

（私は、雷が世の中で一番嫌いなのだ）

「青木 どうした」

私の叫び声を聞いて、先生が飛んできた

「先生！ 雷！きゃー」

私は、二度目の雷鳴に 叫びながら九条先生にしがみついていた。

「大丈夫か・・・？」

先生が私の背中をゆっくりと撫でてくれている

驚きと恐怖で震えていた私の身体は、少しづつ落ち着いてきた

「もう・・・大丈夫・・・だよ・・・」

やっと、自分が誰の胸の中にいるか解ってしまった

「すみません。取り乱して・・・申し訳ありません・・・」

先生の身体からぱつと離れて腰が直角に成るぐらい頭を下
げ謝った

「いいよ。嫌いなんだな？雷・・・」

優等生の青木の弱点 一つ 見つけたな・・・」

先生が軽口を言ってくれたおかげで、少し笑えた

第二話 予感

「けど、お前 結構デカイナ」

「なにがですか？」

先生の視線が 瑞希の胸に注がれた

瑞希の顔がカーと赤くなっているのが、暗闇の中でも手にとるようにわかる。

「何を言っんですか！そんなこと言わないで下さい。一番気にしていることなんですから・・・」

「ん？」

九条には彼女が何を言っているのかわからなかった

「自分の体が嫌いなのか？」

「…はい…大嫌い…です」

「どうして？」

最近の女生徒はエロ可愛いか何だか知らないが、ヤタラと胸を強調する服ばかり着ている。

この高校はまだ上品な良いところのお嬢様が大多数だから、あまり露骨な格好はしないが、

それでも数年前よりは過激になっている。

制服の時はあまりわからないが校外学習で私服になった時など、キャバクラか と思ったこともあった。 それなのに…

ふつとこの優等生の乱れた姿を見てみたいと思った。そんなときでも、敬語を使うのだろうか？

「だって…女女シテルからです。弱いのは嫌いなんです。」

「ハハア　こいつはまだ蕾だな。キット男を知らないはずだ」

無償に自分の中の男を意識していた。

女子高で勤めるようになって、男を意識することを無意識に厳しく律していた。

だから、どんなに可愛い生徒に、どんなに色っぽい生徒に良いよられても教師という垣根を越える　ことは無かった。

しかし…なぜか…　この少女には…

さつきもソファアの横に並んだ彼女の肩が俺の肩に触れるたび、その触れた箇所から得たいの知れない感情が心臓に向かって流れ込んできた。真剣に説明を聞いている瑞希を押し倒しそうになっ　ていたのだ。

「ははは。そうだ青木。明日から毎日放課後　補習するか？このままじゃ二次はキツイぞ。」

「えっ先生　良いんですか？」

瑞希の声が弾んだ。

「ああ。生徒会長のお頼みとあれば、喜んで…」

普段は冗談など口にしらない九条が軽口をたたいてニタリと笑った

先生の車の助手席は煙草の香りがした

結局私が制服だから、近くのファミリーレストランで夕飯を
ご馳走してくれる。

「青木、問題集か教科書出せ。」先生がコッソリ耳打ちする。

「どうしてですか?」

不思議に思っ^て首を傾げる。

オッ この娘はこんな表情も出来るんだな…

第三話 戸惑い

教師が女子生徒と二人だけで食事してるのを煩い保護者に見られたら何を言われるかわかったもんじゃない。

「勉強を教えている振りだよ」

とぶつきらばうに九条が答えた。

俺は大人だから何とでもなるが、青木を傷つけることは出来ない。

「あつ ハイ わかりました。」

優等生の青木が真面目な顔で鞆から問題集かを出した。それと一緒に赤い定期入れが 床に落ちた。

「アツ 駄目見ちゃだめです！」

瑞希は定期を拾った九条から、それを取り上げようと必死になっっている

「なんか怪しいな。見られたく無い写真でも入っているのかな？」

意地の悪い顔をして九条が瑞希の泣き出しそうな顔を覗きこんだ。

「返して下さい」

「返してと言われると返したくなくなるな。ドウセ送って行くんだから、帰りには返すよ。」

そう言われると、渋々諦めて、学校のことなどを話ながら食事を済ませた。

トイレに立った瑞希の隙を盗んで、九条はそうっと赤い定期入れを覗いた。

…俺？…

…隠し撮りした様な俺の横顔がそこにあった…

… オイオイ…

…洒落にならない…

九条の顔に微笑みが残っていた

帰りの車の中で、九条はある計画を立てていた

「ありがとうございます。」

定期入れも返して貰い家の前まで送ってもらった。

車から降りて挨拶しようとしたら、先生も一緒に降りてきた。
?????

「遅くなったから挨拶しておこう」

九条は青木の家に入ってきた

ピンポーン

「ただいま 母さん 私」

「おかえり。遅かったのね。」

「うん。数学の九条先生にわからないところ教えて貰って、
送って頂いたの。」

「まあ 先生 ありがとうございます。どうぞお上がり
になって下さい。」

「女の子を遅くまで引き留めまして、申し訳ありませんでした。ご心配でしたでしょうか？」

九条の口から対保護者用の言葉が出る

リビングに通され青木の母親と瑞希の受験について話していた。

「予備校へ行くか家庭教師を付けようか、悩んだのですが、瑞希は人見知りが激しいので中々いい人にめぐり会わないんです。先生が教えて下さるのでしたら、私達も安心ですわ。出来れば家庭教師をして頂きたいくらいですわ。」

九条の計画通りにことは進みだした。

「そうですね？では、後四ヶ月しかありませんので学校には内緒で、私が青木君の勉強をみましょ。う。うちのカリキュラムではK大の二次まで把握出来ません。センターは大丈夫だとおもいま。すが、二次は…私も青木君には現役で受かって欲しいと願っています。」

願ってもない話に青木の母親は涙を流さんばかりに喜んでい

る。「ありがとうございます。先生にそう言って頂けるなんて…」

「では、お礼は如何程ささせていただいたら？」

「いいません。教師ですから、生徒を教えることが仕事です。ただこの事は他言無用でお願いします。鼻息しているとやっかまれても困りますので。」

「わかりました。先生の言うようにいたします。宜しく願います。」

「では、明日からということだ…」

青木！明日の昼休みに赤本持って来なさい。」

何だか変な方向へ向かい始めた。瑞希は戸惑いながらも、九条先生の側にいれることが単純に嬉しかった。

九条が何を瑞希に教えるつもりなのか知りもしない幼い少女だった

第四話 書

九条は自分の奥に目覚めた小さなウズきに、思わず苦笑いをしていた。

俺が、あんな小娘に欲情しているのか？

ただ、あの少年の様な硬い蕾がどんな風に 花開くのか見てみたい。

自分の手で開かせてみたかった。

今まで 付き合った女性は、もうすでに成熟した女だった。それなりに楽しかったし好きだったが、駆け引きに嫌気がさした。

ましてや女子校という一種独特の雰囲気の中で自分を律し続けていると、俺はもう欲情することなど 無いのかも知れない…と 思っていた。

瑞希に会うまでは…

これから あの硬い蕾がどんな風に花開くか…

紅い花なのか…

白い花なのか…

明日が楽しみになってきた。

* * * * *

翌日の昼休みに、約束通り 瑞希は数学準備室にやってきた

「先生。九条先生。3Aの青木です。はいつてよろしいでしょうか？」

クツクツクやっぱり敬語だ

「どうぞ。」

笑いをこらえて、九条が返事をした

今日は、朝から数学の授業は無かったから、先生と会うのは今日初だ。

瑞希の心は、うきうきと弾んでいた

「おう、弁当食べたのか？」

「はい。先生は？」

「まだだ。」

「じゃあ、もう少し後で来ます。」

遠慮して瑞希が帰ろうとするのを止め、ソファアの隣に座らせた

「じゃあ、今日は君の知らないことを教えてあげよう」

「はい??？」

赤本を開いてノートに問題を解いていく。

九条先生がピッタリと横に引っ付いているので、右肩がドキドキしている

「あーここはねー」と言って私の肩に左手をおいた
(きゃー どうしよう)

心臓が 飛び出そうだ

右手で私の前のノートに解説を書いてくれる。

(だめ・・・頭に入らない・・・)

「あのウ先生？ もうちょっと離れていただけませんか？ 私
ドキドキしちゃって 頭に入らない んです。」
真っ赤な顔をしてうつむいたまま、瑞希が九条に訴えた

そんなこと、さつきからわかっている

ショートカットのうなじもピンクに染まっているんだから・・・

「そうか・・・すまなかつたな？ じゃあこれではどうだ？」

九条は瑞希のピンク色に染まったうなじに 唇を這わせた

「きゃ」ビクツと身体が跳ねる

「先生・・・やめてください・・・」

はにかむように それでも嫌がってはいないしぐさで 九条に訴
える

九条の右手は 瑞希の太股をゆっくりと撫でている

ギュウっと両手を握り締めて、快感と驚愕に耐えている

(どうして・・・九条先生が・・・こんなこと・・・でも・・・)

・・・あっ・・・

瑞希を感じ出した・・・

ゆっくりと耳たぶにキスをし、九条の唇は頬に・・・

そして瑞希の きつく閉じた花びらに優しくキスをした

ゆっくり ゆっくり揉み解すように 花びらを開いてゆく

太股を撫でていた右手は スカートの奥の秘密の花園まで 達していた

瑞希の 顔が徐々に 恍惚の表情を見せ始めた

(女はすごい・・・こんな少女でも・・・自然とこんな表情が出来るのだから・・・)

瑞希の唇が 花開いた

九条の舌を受け止めようとする

今は、これぐらいにしておこう。 ここは学校だ。

昼休み終了のチャイムが鳴った

「今日はこれまで。瑞希が俺のお昼ご飯だった。美味しかったよ」
のぼせたように赤くなっている瑞希を、立たせスカートのしわを伸ばしてやる。

まだ、心は天に昇っているのかも知れない・・・

「ほら瑞希。しっかりしろ。生徒会長だろ。」

後ろからパンと肩を叩かれて、瑞希は正気に戻った

「続きは 放課後な・・・」

「えっ」

第五話 少年の憂鬱

先生は どうして あんなことをしたんだろう？

瑞希にとつて、教師とは尊敬すべき人物であり、それも九条先生は先生方の中でも人一倍尊敬すべき人だった。

九条先生は女生徒に人気はあるが全然馴れ馴れしく扱わないし真面目に授業を受けない生徒には手厳しい。

そんなところも好きだった・・・

厳しく指導されたかった・・・？

何を指導されたかったの？

先生は、私の知らないことを教えてくれる と言っていた

このことなの？

もしかしたら 先生は私の気持ちに気付いたのかも・・・

・・・あっ・・・

しまった あの定期入れだ

見られていたんだ キット

・・・どうしよう・・・

今日も放課後 先生のところへ行かなくてはいけないんだ

また あんな事されたら・・・

(嫌なの??)

初めてのキスだったのに・・・

スゴく気持ち良かったあのまま続いていたら...

放課後 先生の部屋へ行かなければ良いんだ！

・・・でも…

コンコン

「はい。どうぞ」

瑞希が来るのが分かっていたみたいに 九条の低い声がした

「来たんだな。青木」

ニタリと意地悪そうに笑った

やっぱり来なければよかった…泣きそうだ…

「どうした？座らないのか？ ハハア 「青木ツツ立ってないでこ
つちに来なさい。」

「ハイ」

やっぱりナ

教師の命令には逆らえないのだ

…可愛い…真っ白だ…

カチンコチンになってソファアの一番端に座った

二人掛けのソファアなので珈琲を持った先生が隣に座るとどうし
ても体の何処かが触れてしまう

瑞希の体は ほんの少しの刺激でも敏感に感じるようになってい

「青木。そんなに固くならなくても…フフフ…お前 可愛いな」

「??？」

九条が何を言っているのかわからない。

今まで、可愛いなんて 言われたことなどなかった

「今は何もしないから、ほら 本開いて」

胸の前でキック握り締めたK大の赤本を九条が取り上げた

その時 九条の手が瑞希の胸に触れてしまった

ピクッ

弾かれたように瑞希の体に 電流が走る

ニタリ と九条の口元が憎らしいくらい嫌らしく笑った

・けれど、嫌じゃない・

先生もそんな顔をするんだ

「先生 お昼はちゃんと食べましたか？」

ドキドキしている胸のうちを悟らせないように 話を反らした…つ
もりだった

「フフフ 食べたよ。瑞希を…」
・・・しまった藪蛇だ・・・

「大丈夫だよ。心配しなくても、青木をK大に入れることが俺の使
命だと思っているから・・・

今はちゃんと勉強だよ」

瑞希はふーと安堵の表情をした。

「だったら先生 今日私に夕飯をご馳走させて下さいね。」

お母さんから 食事代預かっているんです。お礼にそれぐらいは
つて言っていました。」

それから二時間ビツシリ数学の問題に取り組んだ

外はもう真つ暗だ

11月の夜風は少し冷たい。

先生の車の助手席に乗せて貰って 学校からも家からも少し遠いイ
タリアンのお店に立ち寄った

お母さんに夕飯代を手渡されたとき、着替の上着とスカートを持
つて行くように言われた。

首を傾げている私に母は、先生の立場を考えてそうした方が良く

貴方ももつ少し女の子らしく気が付かなければいけないわね と諭
された

母が 心配しているのは解る

五年前の私とは正反対の今の私

第六話 母の思い

九条先生は、あの昼休み以降、嫌らしいことはしてこなかった。ホツとしたと同時に、少し寂しくもあった

その寂しさは、瑞希にとってはじめて生まれた感情だった

・・・先生が家庭教師をするようになって一月程過ぎた頃・・・

瑞希は、九条先生の数学準備室で、そのことを聞いていた。

「明日からの三連休は、私の家で勉強合宿だからな」
突然の話に、瑞希は珍しく反抗した。

（いつもは、教師の命令には 絶対服従なのだが・・・）

「先生、そんなこと勝手に決められても困ります。」

母にもいえません」

九条は、いつもの少し妖しい笑を口元に浮かべて

「そのことなら大丈夫だよ。親御さんにはもう話してあるし、その連休はご夫婦でお兄さんのいる東京へ行くそうだ。」

十歳違いの瑞希の兄は、東京医科大学で研修医をしている。

今年で研修は終わりなのだ 来年はこっちの病院に戻ってくる

「そんな、私も一緒に連れて行ってくれるって言うてたのに・・・」

「お前は、受験だろ。そんなこと言うててどうするんだよ。」

「本当に、母も了解したんですか？」

あの真面目な母が、娘の外泊を了承するはずは無い

「ああ。この話だって、お母様から言い出したことなんだから・・・
な」

「?????」「えー」

「自分達は、東京へ行くけど瑞希は受験だから連れて行けないので、俺に、申し訳ないんですが三日間勉強を見て頂けないでしょうか」

「?ってね」

「そんなー」

「うそだと思っんなら今日帰ってから聞けばいいでしょう？」

明日、九時に迎えに行くから着替えとお泊りセットを用意してお
くように・・・

問題集は こっちで用意しておくからな・・・わかりましたか？生
徒会長？」

そこまで言われると、瑞希にもどうすることも出来ない

.....

「お母さん、どういうことなの？」

いつもは母にそんな言葉使いはしないのだが、今日は違っている

「明日からのこと九条先生に聞いたの？」

母は、明日から行く東京行きの手ケットを出していた

「そうよ。聞いたわよ。どうして私も連れて行ってくれないの？」

「だって、瑞希は受験でしょ？今年はクリスマスもお正月もないっ
て言ってたじゃない？」

「そりゃ言っただけど・・・」

「・・・けど、先生だって若い男なんだから娘を預けるなんて心配
じゃないの？」

「あら・・・先生はそんなことする人じゃないわよ。大丈夫よ。心配
しなくても。」

私は、瑞希を一人で残すほうが心配だったから・・・先生に相談し
たのよ！

休日なのに、本当に申し訳ないわ・・・先生快く承諾してくださっ
たのよ。

本当に、いい先生に巡り合ったわ。先生に教えていただいてから、
模試の成績も上がったでしょ？」

「そりゃそうだけど・・・」

「それとも、先生に何かあるの？」

「まさか・・・」あんな事言える分けない・・・

それに、あのときの九条先生が少しおかしかっただけなのかも知れない・・・

だって、あれから何もしてこないし・・・

・・・ヤダ・・・私、何かしてくれるのを待ってるみたいじゃない・・・

・・・

翌日、九条先生が家の前まで迎えに来てくれた

先生が、車から降りてお父さんと握手している。

初めて顔を合わすのに、知り合いみたいだ

それを、お母さんが窺っているみたい・・・変なの？

その日は 父と母もすぐに出かけるので九条が駅まで一緒に送っていった

「九条先生、今回は本当にご迷惑をおかけします。」

父が、九条に私のことを頼んでいる

何かおかしい 普通は娘が若い男と一緒にいるだけで怒鳴り散らすのが父親なんじゃないの？

「それじゃあ、これから何処へ行くの？ ん？」

いつもの先生と少し違う。

いつもは少し意地悪な笑を口元に浮かべて、憎たらしいことばかり言うのに・・・

「先生？ 何処って先生のお家で勉強するんですよね？」

「そうだよ。だけど三日間も勉強ばかりだと気が迷いでしょ。夕方まで、何処か行こう！ね？」

九条先生はそう言っただけで車を走らせた。

街並みはクリスマススムード一色だ。

それもその筈、明日はクリスマスなんだ。

それすら、瑞希の目には入ってなかったのだ。

可愛そうなくらい受験に対して神経質になっている。

張りつめた糸の様に、まだまだ足りないと思っていた。

「先生。でも今はそれどころじゃ無いんじゃない？」

そう言いかけた瑞希の唇を九条の冷たい唇が遮った。

．．ん．．

強く 長く 優しいキス

一度は経験していたが、そんなものじゃなかった．．

躰の中心が痺れる様な 甘悩的なキス

．．うん．．

．．せ．ん．せ．い．．

そう言っただけでも、なにウググとしか聞こえない。

私の体から力が抜けていく

「大丈夫だよ。キット合格させるから。俺の言う通りにすれば大

丈夫だから。

それとも、俺を信頼出来ないか？ 瑞希？」

九条の瞳が悲しそうに曇った。

「ううん．．あついでそんなことないです。」

瑞希は首を横に振った。

「そんなに振ると頭が取れちゃうぞ！ハハハ」

「じゃあ、USJでも行くか！クリスマスバージョンには行ったこ

とないんだよ。瑞希は？」

「またもや首を横に振る。」

「じゃあ決まりだな。」

湾岸線を走って、USJの姿が見えてくる。

「先生。凄い人・・・」

「本当だな・・・」

これ程だとは思わなかった。クリスマスの休日は凄い人なんだ・・・
瑞希の気持ちを緩めてあげたかった。

真面目で神経質な彼女の事を心配しているのは九条だけではない。

瑞希の両親も勉強以上に心配しているのだ。

第七話 九条の部屋

九条の車は、湾岸線を神戸に向かって走り出した。

「先生・・クリスマスって、どうしてこんなに人が溢れてるの？」

何処もかしこも人・人・人

「本当だな。俺もちょっと困惑している。」

ここ何年もクリスマスに街に出たことなどなかった。

・・クストツ・・

瑞希が戸惑っている九条を見て笑った。

「先生。かわいいですね」

いつもは自信满满で何にも動じない九条が、少年の様に戸惑っている。

「先生。帰りましょう」

人混みの中で、はぐれない様に手を繋いでいた瑞希は立ち止まって九条の顔を見上げた。

「人混み苦手なんです。早く先生のお家でゆっくりしたいんですが・

・

瑞希は人混みが苦手だった。怖いのだ。

繋いでいる瑞希の手が急に冷たくなってきた。 ・・ドウシタンダ・

・

「じゃあ帰ろう。な。帰りにスーパーに寄って食料買って、二人でクリスマスパーティーするか？」

* *

「先生。こんなに買って食べきれませんよ。」

次々と買い物籠に食料品を入れる九条に、瑞希は呆れていた。

まるで新婚みたいだな・・

頭の中に浮かんだ言葉に、恥ずかしくなって真っ赤になってしまった。

「何 赤い顔をしてるんだよ？何か想像してるだろ？」

九条には全て見透かされている。

「そんなことないです。」

「ムキになるところは怪しいな。フッフまあいいか。これからゆっくり聞き出してあげるよ。」

ニタリと妖しい笑を口元に浮かべて、九条は瑞希の肩を引き寄せた。
・・ゾクツと背筋に快感が昇る・・

「先生。駄目です。誰かに見られてしまいますよ？」

「別にいいよ。誰に見られても・・教師が恋をしてはいけない法律なんてないだろ？」

・・恋?・・恋って言ったよね?・・

「先生？」

瑞希は、戸惑った顔も 可愛いな

九条はサツサとレジを済ませて、重い袋を片手に

もう片方の手は瑞希の手を繋いだまま車迄戻ってきた。

助手席に座らされた瑞希の耳元に

「本気だからね。」と九条が囁いた。

先生のマンションは赤い煉瓦造りの洒落た外観だ
その最上階五階に先生の部屋があった。

初めて男の人の部屋に入る。それだけで、瑞希の心臓はドキドキしている

神戸でサンドイッチを食べたからお腹はすいていない。

リビングの黒いソファに座らされた瑞希は落ち着かなくてキョロキョロと辺りを見渡していた。

「何か怖いな。あら捜してみたいだ。何も無いよ。この部屋に入った女性は瑞希が最初だからね。」

「エツ 先生彼女いないんですか？」

「いるよ。」

瑞希の胸はキユンと締め付けられそうだ

「でも、その人来たこと無いって・・・」

落胆を見せないように下向いていると、隣にお揃いのマグカップを持って九条が座った。

「だから、ここにいるじゃない。」

何を言っているのか分からない。

・・・エツ・・・

「だって先生そんなこと何も言わなかったし・・・」
思考回路がメチャクチャになっている。

「まさか・・・一月前の昼休みの事も お前 どんな風に思ってたんだ？」

いくら俺でも、好きじゃない女の子にあんな事しないよ?」

「エエツ 先生の気まぐれか、欲求不満？」

「オイオイ。それじゃあ、まるでセクハラ教師じゃないか。」

「だって知らなかったから・・・」

泣きそうになって手を握り占めている瑞希を見ると、嗜虐的な感情が沸いてくる。

「あああシヨックだな。」

俺は瑞希を合格させるために自分の感情を押さえてたのに、

そんな風に思われてたなんて・・・アアア」大袈裟に頭を抱え

て、打ちひしがれる

「すみません。先生ご免なさい。ああどうしよう。どうしたら許してくれますか？」

私許してくれるなら、何でもしますから。先生本当にご免なさい。許して・・・」

本当に悪そうに懇願している。

「本当に何でも言うことを聞く？三日間だよ。」

臥せ目がちに九条は落ち込んでいる・・・？・・・

「はい。モチロンです。一生でも」

「ほんと！」シマツタ！策略にはまってしまったみたい・・・

瑞希は泣きそうになってしまった。

「大丈夫だよ。瑞希が出来ることしか言わないから・・・俺の言うことを聞いていれば何も心配いらぬい」

そう言っつてついはむようにキスをした

第八話 トラウマ

九条は瑞希の肩を抱きながら、温かいココアを瑞希の手に持たせた。

「さーてと、何から教えて貰おうかな？」

九条の瞳が光る。

先生の言葉に瑞希は身構える

「さつき、人混みの中で瑞希は体を冷たくしたね。何があったのかな？」

何か意地悪な質問をされるのかと不安気だった瑞希は少しホツとした。

九条がとても優しい瞳で見つめてくれる。そんな先生を見たのは初めてだった。

九条の手は優しく肩を撫でている。

「私 人混みが怖いんです。五年前、通学電車の中で男の人に痴漢をされて・・・。」

男の人も怖くて・・・その人が、耳元で いやらしい身体をしているね。っていったんです。

私の体がイケないのかも知れないと思って・・・私は汚れているんだって・・・

長かった髪の毛も切ったんです。」

泣き出しそうな瞳をしているが、凜とした芯を持っている瑞希のことが とても愛しく 九条はギュウと抱き締めた。

・・・九条は瑞希の母親からその事について相談を受けていた・・・

それまでの瑞希は本当の意味のお嬢様で、両親の庇護のもと、大切に育てられた。

その日瑞希は泣きながら帰ってきて、熱を出した。ショックで三日間寝込んでしまった。

その日以後、女の子らしい仕草も格好も成を潜め、男性に寄りかからない少年の様な瑞希が生まれた。母には娘の姿は痛々しい程に強がって見え、早く以前の可愛い瑞希に戻って欲しかった。

それは今まで母にしか話したことの無い瑞希の恥部なのだ。

とうとう大きな瞳からダイヤモンドのような涙がポツンポツンと溢れた。

九条の唇が その涙を受け止める。

「泣いていいんだよ。思いつきり声を出して泣いたらいい。此処には俺しかいないから・・・」

瑞希の肩が震え出し、オエツが溢れてきた。

「ウツウツ ウワァー」

九条の胸に顔を埋めて瑞希が号泣する。

「瑞希は全然悪くないんだからね。悪いのはそんな卑劣な行為をした男の方だ。」

もし、これから瑞希を傷付ける奴がいたら、男であろうと女であろうと俺がぶちのめす。

だから、瑞希、全ての男性がそうだと思わないで欲しい。」

これでは、まるで プロポーズだ

九条は思わず出た自分の言葉に驚いていた。

確に 瑞希の御両親にこの娘のことを頼まれ、九条自身も愛しく思

っているが、一生守ると言ったんだ。

・ ・ ・この初な少女は、そんなことに気付いてはいないはずだが ・ ・ ・

「俺のことも 怖いか？」

頭を撫でながら問掛ける。

九条の胸の中で少し落ち着いていた瑞希が首を横に振った

涙でうるんだ瞳で見上げられると、理性のたがが外れる。

「愛してる。」

第九話 花開く

「先生、駄目です・・・そんなところ・・・あん・・・」
「何が駄目なの？」

九条が瑞希のうなじにキスの雨を降らせる

瑞希が逃げないように、九条の手は肩を抱きしめている
右手が白いセーターの裾から入り込み、ブラジャーの上から羽根で撫でるように優しく愛撫する

白い肌がピンク色に染まってきた

・・・あ・・・ん・・・はん・・・だ・・・

声がつながらない

瑞希が感じている

九条の唇が瑞希の唇にたどりついた

すでに感じ始めている瑞希が応える

・・・おお、まだ二度目のキスなのに俺を求めている・・・

九条は、感動していた

自分の手で少年から少女に　そして　女性に変えて行く

・・・愛しい人だ・・・

俺はこの子から離れられなくなる

瑞希の乳房は、とても豊かで、それでも堅い少女のものだった。

九条の指によって、頂点の突起はつんと堅く上を向いていた。

コリコリと指が動かたび、瑞希の顔が　苦痛とも快感とも言えぬ表情を映し出す

九条の左手はゆっくりと瑞希の背中を撫で、腰に、そしてスカートの中へ入っていった。

・・・ピクツ・・・

身体中が性感帯になっているみたいだ。

少しの刺激で 瑞希の身体が今まで味わったことのない快感が溢れ出てくる。

・・・キツトこの奥の花園も・・・

それでも九条は、ゆっくりと指を滑らせた

膝から上へ 打ち寄せる波のように ゆっくりと・・・目指すところへ

瑞希の身体が 開いてきたのを 見計らって彼女のセーターを取り去った

白いブラジャーから溢れそうな乳房を 優しくそして強く 揉み砕く

ブラジャーの上からでも 堅い突起がわかる
その上から触れるか触れないようにくりくりと指を回す

乳首への刺激が 瑞希の身体を駆け巡る

・・・私はどうなっているんだろう？・・・

先生の舌先が、指先が触れるたび 新しい快感が襲ってくる

あの時 知らない人に触られたより もっと触られているのに、
全然 嫌じゃない。

それどころか、次の事を期待してしまう。

同級生の中で、ほとんどの女の子はもうすでに経験があるらしい。
まだ未経験の友達も、早く経験したいと話していた。

いま、私は九条先生の手によって経験しようとしている。

九条の指がショーツの上から瑞希の秘部を優しく撫でる。

ツンツンと指の腹で敏感な箇所を突つく。

そのたびに瑞希の頭には何も考えられないような快感が沸き上がっていた。

・・・くう・・・はぁ・・・あっあっ・・・

甘い切ない声が、瑞希の口からたえまなく漏れる。

その声を聞かたび、九条の気持ちも高まっていく。

「瑞希？ 嫌じゃない？ 瑞希が嫌ならやめるよ。 今ならま

だ間に合うから。 嫌？」

九条は優しく、耳元に囁いた。

今は、瑞希の心の重石を取り除く事が先決だった。 無理をするとこの娘は壊れてしまう。

・・・嫌じゃない・・・やめないで・・・瑞希が控え目に首を横に振る。

「ちゃんと口で言わないとわからないよ？ 嫌なの？ 良いの？」

これは意地悪で言っているのではない。

瑞希の躰がちゃんと、男性と向き合えるように自分の気持ちを自覚させなければいけない。

教師である九条がここにいる。

「嫌じゃないです・・・先生なら良い・・・」精一杯の言葉だった。

・・・堪らないな・・・

拐ってしまいたいほど 愛しい・・・

「じゃあ、やめないよ。 もう 嫌って言っても止められないからね。

」

九条の瞳に、妖しい光が宿った。

瑞希の膝と脇に手を入れ抱き上げた。

隣の寝室のベッドに優しく寝かせられ、スカートを脱がされた。

瑞希は白いブラジャーとショーツ姿でベッドの上に横たわっている。

「綺麗だよ。」

九条の視線が身体中に注がれているのが恥ずかしい。

九条自身もシャツとジーンズを脱ぎ捨て黒いボクサーパンツ一枚となっていた。

その中心は、大きく膨らんでいる。

モデルの様な均整の採れた肉体。

服を着ていると華奢に見える九条の体は、適度に鍛えられた筋肉に覆われていた。

その先生が瑞希の上に跨る。両手両足で瑞希の体が束縛された。

男の人の裸体をこんなに近くで見たことなんてない。

恥ずかしくて、少し怖かったが九条の唇が瑞希身体中にキスの雨を降らせる頃にはそんな恐怖心もなくなっていた。

首筋から胸元 肩から指の先まで 九条の舌が愛撫していく。

訳がわからないうちにブラジャーは取り外されていた。

ピンと立った乳首を 口に含む

・・・あっ・・・ん・・・だ・め・・・

身体中が 桜の花びらの色に染まる

たえまなく降り注ぐ快感が、瑞希のなかの女を開花させようとしている。

九条の手が乳房を捕まえた。

螺旋を描くように揉みくだき、二本の指が乳首をコリコリと刺激す

る。

もう片方の手は腰から太股を愛撫し、堅く閉じた膝から上に昇っていった。

少し強引に膝を広げ、閉じないように足を入れる。

少女らしい白いレースのショーツにしつとりと女の湿り気が浮き出ている。

中指で押さえてみると、クチュと愛液の感触がした。

脇から指を滑り込ませると、そこはもう既に溢れている。

もう充分濡れているが、それでも九条の指は瑞希の花園を愛撫していく。

・せ・ん・せ・あっ・だ・はあ・

たえまなく続く愛撫によって瑞希の躰は、溶ろけそうになっていた。

初めて味わう快感

快感という言葉も物足りない。躰の中心が痺れる。

恥ずかしくて堪えていた声も、抑制が効かなくなり絶えず溢れてくる。

ショーツはいつの間にか脱がされていた。

「瑞希はここも綺麗だよ。」

九条は瑞希が自分でも見たことのない花園を見つめている。

「いやあ。駄目・先生、見ないで・恥ずかしい」

羞恥心が瑞希の体を熱くする。

「どうして？こんなに綺麗なのに？綺麗な雫が溢れてくるよ。」
そう言っ指で秘密の蕾を隠している花びらを広げた。
今度は少し強い刺激を蕾に与える。

瑞希の躰がピクツと跳ねた。

「アアゝはあゝん」

甘い声が溢れた。

九条の指が一本蜜壺の中に入っていった。

「クツ」

瑞希の体がしなる。

中は熱く溶けているのに、指でさえキツク締め付けてくる。

二本目の指を挿入した。 ゆっくり出し入れを繰り返す。

トロトロと蜜が溢れてくる。 指が痺れる位のキツサに九条自身も

限界に来ていた。

スツと指を抜き自分もボクサーパンツを脱ぎ捨て痛いくらい体積を増していた九条自身の欲望は、初めての瑞希には酷かも知れない。

「瑞希　ずっと愛してる　ずっと離なさない」

快感の渦の中で瑞希は九条の愛情を受け止めていた。

・・・先生が好き・・・

言葉で言い表せない程　先生が好き・・・

「入れるよ。」九条の欲望が　瑞希の蜜壺のくちに当てがわれた。
その間にも瑞希の乳房を愛撫する手は止めない。少しだけ挿入する。

「ああーうぐー」　苦痛に顔をしかめる。

「力を抜いて・・・」　九条は耳たぶを噛み、囁く。

瑞希の体から力が抜けた時　固い力が奥まで挿入された。　体が引

き裂かれる。

苦痛で背中が弓の様に反っていた。

「ゴメンね。痛くして・・・」 九条優しい声に涙が溢れる。

「・・・うん・・・大丈夫 先生が好きだから・・・アー」

瑞希の中で九条自身が蠢いた。

・・・感じ始めている・・・

「動くよ」

ゆっくりと繰り返す。痛みは少しずつ快感に代わっていった。

九条は射精感を抑えるのに必死だった。瑞希の壺は柔らかくそしてキツイ。

締め付ける力は指の時以上だ。

たえまなく漏れる甘い声に九条のピッチも自ずと速くなる。

瑞希の体がピクピクと震え出した。 九条の背中に回された手が強く爪を立てる

「アアー ああー」

瑞希がイクと同時に九条も果てた。瑞希の瞳から涙が一滴流れ落ちた。

「綺麗だよ。瑞希」

その雫を舌ですくい、九条は瑞希の体を抱き締めていた。

第九話 花開く（後書き）

愛読ありがとうございます。励みとなりますので講評を頂ければ幸いです。

第十話 甘い時間

瑞希は、今まで嫌いだった自分の躰を、愛しく感じていた。九条の愛情を受け止めることの出来る女の子の体が 愛しかった。

九条はグツタリとしている瑞希を抱き上げ、浴室に連れていった。九条を見上げる瞳は、艶やかにうるみ、切なげに見える。
・ ・ ・こんな表情が出来るなんて ・ ・ ・

硬質な少年のようだった瑞希は、九条によって女に変化した。いつの間にか満たされていたバスタブには、ジャグジーの泡が溢れている。

瑞希の体をゆっくりと沈め、九条自身も彼女を抱いたまま沈みこんだ。

二人を飲み込んだお湯は溢れ、洗い場がお湯で一杯になる。

「まるで瑞希のあそこみたいだね。フッフ」

意地悪そうに九条が耳元に囁く。

「もう 先生つたら。意地悪」

恥ずかしくてプツと頬を膨らませる。

昨日までの瑞希には、こんな仕草さえ出来なかったのだ。少女らしい瑞希が戻ってきた。

「瑞希 とても良かったよ。」

耳元に付くか付かないように囁く九条の息が また瑞希に刺激を与えてしまう。

「もう 知らない」

「だって初めてのHでイツちゃうなんて あまり聞かないよ。」
九条の口元に妖しい笑が浮かぶ。後ろから抱き締められたままだから 身動きが自由に取れない。

カーツと赤くなる。恥ずかしい。私って普通じゃないのかな？

「だって 先生のせいだもん。」

「それって 俺が良かったってことかな？」

瑞希が困れば困るほど、いじめたくなる。

「もう そんなこと 言えない！」

「こら 俺の言うことを聞くって言ったのは誰だっけ？」

妖しく笑う九条は瑞希の反応を楽しんでいた。

「だってえ・・・」

「言って！言わないと・・・」

無防備な乳首をキュっとなんだ。

「・・・あん・・・良かった・・・」

「また する？」

「・・・あ・・・」九条の指が瑞希の乳房を揉み始めた。

くぐうー？

???

「ハハハハ」瑞希のお腹の虫が鳴ったのだ。

「いやあ」恥ずかしくて恥ずかしくて両手で顔を覆った。

さっきまでの色っぱい会話が嘘のように、先生と生徒に戻ってしまった。

「ごめんなさい」

「いいって。あんなに乱れた後なんだからお腹も空くよ。フッフ。」

「そうだな。何か食べたいものある？」

「先生が作ってくれるんですか？」

「一人暮らしが長いからね。」

寂しそつに見えたのは、瑞希の錯覚？

「ソロソロ出ようか？」

九条が瑞希の体を持ち上げ 体に付いた泡を洗い流してくれた。ち

やっぱり乳房にキスをして・・・

2人は、部屋着に着替えてリビングに戻った

「じゃあ 出来るまで、少しこの問題集をしておくように」

「えっ 勉強するんですか？」

「だって、勉強合宿だろ？ 瑞希は何をしにきたのかな？」

見慣れた、いつもの先生の瞳だけれど、いつもより優しい・・・

もう少し先生の胸に抱かれていたい・・・そんな胸の内を見透かされ
それで 恥ずかしい

そうだ・・・私は受験勉強をしなければ・・・

問題集を 見ているとウツらウツらしてきた

学校では、居眠りなんてしたことなんて無いのに

ローテーブルの上に 顔をつけて眠っていたみたい・・・

・・・みずき・・・みずき・・・

幸せそうな顔をして寝ている。 安心しているんだろう

今までの忌まわしい呪縛から 解き放たれたのだ

俺が この少女を開花させようとしたことは あまりにも傲慢だった

俺がこの少女に癒されている

無垢な真っ白な少女が、ありのままを曝け出して応えてくれた

苦痛だったはずだが、それすら自分の海に飲み込んで 俺の心を
満たしてくれた

・離れられない・何があっても・離さない・

二十八歳の大人の俺が、十八歳の少女を求めている

教師だからとか 大人だからとか 関係ない

一人の人間として、瑞希という少女を欲している

・ん・

幸せなذورみから覚めた少女

幼子のような何も不安のない瞳 心からの信頼を寄せている証

扱だ

「瑞希 御飯出来たよ。」

「あつ ごめんなさい 私寝ちゃいました。」

「寝顔も可愛かった」

「もう 先生」

出来上がっていたパスタは少し冷めてしまった。

仕方なくソースを温めニンニク風味のオリーブオイルでパスタを炒めた。

最初のレシピとは少し違うが、此れはこれで美味しい。

「これ 本当に先生が作ったの？わあ 美味しい。」

「そうか？瑞希が喜んでくれて作った甲斐があったよ。」

「先生ついてるよ」瑞希の指が 九条の口元に触れる。

パスタのソースが唇の端に着いていたみたいだ。

拭った指を スツと舐める。

瑞希は自然にしているつもりなのだろうが、凄くエロティックだ。

「先生？」

「ん？」

首を傾げて 微笑んでいる

瑞希の唇 黒目がちな瞳 スーと通った鼻筋 雪の様に白い肌
視線を 外せない

瑞希の視線を誤魔化すように

「あつ そうだ。スーパーで何を考えていたのかな? ん?」

「えっ?」急にそんなこと言われたって・

・ ・ ・ あんな事 口に出来ないよう

もう、忘れてるって思ってたのに・ ・

「何のことですか?」答えがギクシャクしてしまった。

「ハハハ。瑞希は嘘が下手だな。」

「言いなさい。約束だろ?俺の言うことを聞くって?」

・ ・ ・ ぐつ ・ ・ ・ 口をきつく結んで下を向いている

「ははあ ・ ・ ・ Hなこと考えてたな?」

「違います。そんなこと ・ ・ ・ そんなこと考えてません!」

むきになって否定する顔も可愛い

「じゃあ。言いなさい。何を考えていたのですか?青木君?」

「先生 きつと軽蔑するから・ ・」

「しないよ」

「本当?」

「ああ。何を聞いても嫌いになんてならない」

瑞希の頬が ほのかにピンクに染まった

「あの ・ ・ ・ ね ・ ・ ・ し ・ ・ ・ ん ・ ・ ・ こん ・ ・ ・ さん ・ ・ ・ みたいだなんて
消え入りそうな声で 囁いた

ニヒルな声が意地悪を言う

「聞こえないなあ。もう一度言ってみて?」

・ ・ ・ こんな恥ずかしいこと ・ ・ ・ また? ・ ・ ・ 泣きそうになった

「新婚さんみたいだなって思ったの・・・」

九条の心の奥が 暖かい気持ちに覆われた
・・・泣いてしまいそうだ・・・

「俺も そう思ったよ・・・瑞希と ずっと こうして一緒にいたい
って・・・」

うつむいていた顔を上げ、ぱっと輝くような瞳を見せる

「瑞希 本当は明日のクリスマスイブに 言うつもりだったんだけど・・・」

ずっと 一生 一緒に生きていこう・・・愛してる・・・
いつものニヒルな先生じゃない。照れた顔も可愛い・・・

「・・・私・・・ずっと先生のことか 好きだったの・・・
本当は、数三何て分からないし でも少しでも先生の側にいた
くて・・・卒業だし・・・そんなことしか思い付かなかったの・・・」

通りで一生懸命やっている割には、成績に繁栄されていないのだ。

「じゃあ 瑞希は本当は何がしたいんだ？」

瑞希の志望校は国立K大の理学部の数学科だったはずだ
俺と同じ学科を目指していると聞いている。

「都市設計をやって見たいんです。」

凜とした少女の瞳が、硬質な光を放った。

「ほう・・・」

瑞希はデザートのリんごを剥きながら、先生の問いにきちんと答えている

前から都市環境に興味があったこと

でもあまり女性が興味を持つ分野じゃないから躊躇していたことなら、先生と同じ大学を目指そうと思ったこと など・・・

九条は瑞希の剥いたりんごを頬張りながら、暫く考えていた

「今からの志望学科の変更は苦しいけれど、工学部ならそんなに入試科目も違ってこないから大丈夫だろう。これから、工学部の問題に取り組みか・・・？」

2人で、後片付けをして 問題に取り組んだ。

瑞希には、工学部の問題の方が合うようだ。

あつと言う間に四時間がたっていた。

「もう九時だな。そろそろ終わらないか？」

九条の方が、先に音を上げた。

「えっ」無心に問題に取り組んでいる瑞希に、時間の観念が無かった。

「九時だよ。そろそろ、俺の相手してよ？」

痺れを切らして、愚痴を言っている。

目の前のデザートのお預けを食っているみたいだ。

「先生。あとこの問題を解いてから・・・」

「ええー 嫌だ。」

そういって、瑞希の後ろから腰を抱きしめた。

「先生、もう少しだから・・・」

「うん。良いよ。俺はこうしているから、瑞希は解いて・・・
後ろから、瑞希のうなじに熱いキスをする。」

・・・はあー・・・

「先生 駄目だって・・・あ・・・うん・・・あん・・・」

瑞希の頭の中から、公式が飛んでいつてしまった
思わず頭がのけぞる　その瞬間に九条の唇が瑞希の唇を奪った

うつ・・珈琲の味のする舌がネットリと　口の中で蠢く

それだけで恍惚の表情を浮かべた瑞希・・

「瑞希って　すごくHな表情しているよ・・」

腰に回された両手は、上の膨らみを弄んでいる。

二本の指先が、すでに堅く立っている乳首をコリコリと弄ぶ。

・・あん・・あつ

「ほら、乳首だつてもう堅くなってる。嫌らしいな・・」

「・・もう・・せん・・せい・・が・・あ・・」

「ん？　キットここももう溢れているよ・・ふふふ」

言葉で攻められ、手で攻められている

九条の手が、部屋着のパンツの中に入っていく

下着の脇から指が　とろとろに溶けている蜜壺の蕾を擦るよつに刺
激する

・・ああ・・そこ・・は・・ああ・・

数時間前に　はじめての花を開花させた身体は　また新しい快感に
包まれようとしていた

第十一話 夢の続き

瑞希は 今 快樂の海にいる

寄せては返す波のような快感が 瑞希の全身を覆っていた

・好・き・

・せん・せ・い・が・すき・

瑞希のとろけるような声が 九条をより一層感じさせる。

何度聞いても 飽きることのない愛しい声

体だけではなく 心の底から この少女を求めていた

その夜、瑞希は 九条の腕に抱かれ眠りについた。 親鳥の羽に

くるまれているような 暖かく 優しい眠りに・・・

九条の胸に顔を着けて・・・瑞希は夢を視ていた・・・

光君？ 光君？ 幼い瑞希が 少年を探していた。 何

処へ隠れたの？ 薄闇に包まれ始めた公園で 一人ぼっちになっ

た瑞希は 涙声になりはじめた。 光君？ どこ？ 光君？

不意に後ろから抱き締められる。 ビクツとする瑞希を ケラ

ケラ笑って 光君が抱き締めていた・・・

「みずき オハヨウ」

いつの間に 支度したのか、テーブルには朝食が出来ていた。開け放した寝室のドアから九条が声をかけた。

「おはようございます。」
シーツを巻き付けたままで 瑞希が答えた。

朝の光の中で、自分の姿を見て急に恥ずかしくなったのだ。

「ん？どうしたのかな？」

寝室のドアにもたれて見つめる瞳は、いつものクールな九条先生だ。学校中の女生徒が（ううん女性の先生もだ）好意を寄せているニヒルでセクシーな先生がそこにいた。

「せんせい。 恥ずかしいから 見ないでください。」

服を着ようにも、一度はベッドから出ないといけないのだ。

「どうして？」

「だって・・・恥ずかしい・・・」

ニヤリと口元に妖しい笑を浮かべて、

「どうして？昨夜はあんなに乱れた瑞希が見れたの？」

瑞希の綺麗な躰中、全部 目に焼き付いているよ。」

「もう 意地悪！」

「ハハハ

判ったよ。 スープ冷めちゃうから 早くおいで」

先生がドアを閉めてくれたから、安心して全裸のままベッドから降りた。

横に置いた旅行鞆から新しい下着と

黒のタートルセーター 黄色と黒のチェックのミニスカート
をはいた。

お母さんが買ってきてくれた上下。

チヨツと短いんじゃないかな？
クローゼットの姿見に写してみる。

どうしても丈が気になる。

「クツクツクツ」

いつの間にか九条が瑞希の着替を見ていた。

「もう先生！ 見ないでください！」

必死になる瑞希の顔がおかしくて、笑いが止まらない。

ハハハハハハハハハハ・

「もう 知らない！」

プイッと怒って、座り込んでしまった。

「ごめん。ごめん。余りに可愛かったからさ・・・つい・・・
似合ってるよ！」

「本当？ 短すぎないですか？」

スカート裾に手をやりモジモジしている。

「俺の前だけなら、いいんじゃない？」

ニヤリと口元が上がった。

先生の作ってくれる食事は、とても美味しい。

・・・先生の奥様になる人は幸せだろうな・・・
そんなこと想像して、チヨツとシヨツクを受けた。

「また何か想像してるね？」

ベーコンを口に入れようとした先生が 瑞希にたずねた。

「エッ なにも。」

「君の考えていることぐらいわかるんだから言いなさい！」

「く先生の奥様になる人は幸せだろうなって考えてたら キュン
つて……」

テーブルの向かいから先生の大きな手が私の頭の上につて来た。

「そうか？でもここにいるだろ？」

「ヘッ？」

「俺の前にいると思うんだけど・・奥さんになる人」

「先生？ホント？嘘」

「こんなこと 冗談でいえないからな。」

「……」

「昨日も言っただけど、俺は 本気だからね。嘘や冗談で 瑞希を抱
いた訳じゃないからね。離さない……」

いつになく真剣な眼差しの九条の激しさだった。

「先生……私なんかで……いいんですか？」

泣きそうな顔をした瑞希が、震える声で問いかける。

「瑞希じゃないと駄目なんだよ。」

優しく諭すように応えてくれた。

「まだ 返事は無理？」

「サンタクロースって本当にいるみたい。一番欲しかったプレゼン
トをくれた……」

「もっと もっと沢山のプレゼントをあげるよ。」

「あつ　でも　お母さん達に何て言おう?」
「明日の帰りに　ちゃんと挨拶しようね?」
先生がちゃんと真剣に自分の事を考えてくれている　それだけで
瑞希には充分だった。

「でも　瑞希。受験はキチンとしような?やり始めたことは最後まで
で　やりとげないと・・・

学園一の秀才なんだからな!　校長も教頭も期待してくれているん
だし。　俺の評価も上がるってもんだよ。」

「はい。先生!」

生徒会長の瑞希がいた。その日は　一日をK大の赤本に取り組んだ。
先生の教え方は、今まで教えて頂いたどの先生より、判り安かった。
判らない所を、的確に判断しポイントを教えてくれる。
自分で理解し、解決するために導いてくれる。
簡単な昼食を済ませ、昼からも、鉛筆の音が響いていく。

外が夜の闇にかわりはじめた。

「瑞希　そろそろ終わろう。」

「はい」

「これから出かけるから、これに着替なさい。」

九条の手には黒いノースリーブのワンピースだ。

「何処に行くんですか?」

不思議そうに首を傾げる姿も　愛らしい。

「イブだからね。ディナーをしよう!」

今思い付いたように　見える。

けど、ワンピース用意してくれているし・・・???

ワンピースを持って寝室で着替えた。誂えたようにピッタリ。上半身はスリムなラインでウエストから緩やかに膨らんでいる。プリンセスラインだ。

瑞希の清楚な雰囲気壊さず、ほのかなセクシーさも漂っている。寝室から出ると、スーツ姿の先生の姿があった。

第十二話 イブの夜

いつも思うことだけど、先生のスーツ姿はとても素敵だ。

さっきまでのラフな格好も似合っていたけれど、やっぱり先生はスーツ姿が一番良いなって思う。

足が長くて、肩幅が広くて、セクシーな容姿をスーツの堅さが上手く調和している。

メンズのモデルにも劣らないはずだ。

「瑞希 その服に素足は似合わないなあ。チョット そこへ座ってくれろ?」

視線が、ソファアをさしている。

???

言われるままに 座った瑞希の素足に、九条がストッキングをはかせてくれる。

「キャ!先生そんなこと、自分で出来ます。やめてください。」
恥ずかしくて真っ赤になってしまった。

「どうして?シンデレラみたいだろ? 今日、瑞希はプリンセスなんだから・・・」

そう言つて、瑞希の足先からゆっくりと薄いストッキングをはかせていった。

細く長く、男らしい指が薄いストッキングと一緒に瑞希の脚を昇ってくる。

・・・艶かしい姿だ・・・

それだけで 感じていた。

両足に履かせて、九条の手は 脚の付け根まで上がってきた。

「・・・ハア・・・」

「ククク。瑞希 感じてる？」

下から見上げる九条の瞳は、妖艶な光を秘めていた。

「ん もう 意地悪！」

「感じるのは、まだ早いからね？ 後で もっと 感じさせてあげるよ。」

そう言っつて瑞希の脚の甲に キスをした。

そして、後ろから 黒いパンプスを出して、本当に シンデレラのように足に履かせた。

「では 姫 まいりましょうか？」

白いファーのボレロを羽織、先生のエスコートで車に乗り込む。

途中 九条の知り合いの美容室で 薄くメイクをした瑞希は

本物のプリンセスのような気品と優雅さをかもしだしていた。

「綺麗だよ。」

「なんだか 恥ずかしい。こんな格好初めてだから・・・」

着いた先は、リッツカールトン

慣れた感じの先生に エスコートされ、クリスマス一色のロビーを歩くと、周りの人達が振り向く。

美男美女の組み合わせは いくらでもいるが、これほどまでに 気品のあるカップルはいない。

フロントのマネージャーさえ見とれてしまっていた。

「予約している九条ですが・・・」

「あっ はい。」 気をとり直して、

「受けたまっております。 お料理の方も御用意させて頂いております。」

クリスマスツリーの華やかさも 瑞希の美しさには負けるだろう。元々 綺麗な容姿をしているが、これほどまでに美しくなるとは 仕掛けた九条自身 誤算だった。

周りの男の視線が、一段と熱くなっている。

隣の彼女そっこのので、ポーツと見とれている。

九条の斜め後ろを歩いていると、女性からの射すような視線に何度 睨まれたことか・・・

・・・あなたみたいなお子ちゃまに 釣り合わないわ・・・
そう言っているように・・・

「瑞希が一番綺麗だよ」

耳元で囁いてくれた。

周りの女性からの視線に、卑下していることを見ぬかれている。

・・・たったそれだけで 自信が持てる・・・

エレベーターで着いた先は

・・・ スイート・・・

ドアを開けると、そこには 飾り付けられたディナーが待っていた。ポーツとなっている 瑞希の上着をとり 椅子に座らせると 九条は向かいに座る。

直ぐにルームサービスのボーイが来て給仕を始め、先生は慣れた感じで、ワインを頼んでいた。

お料理も飲み物も用意が済み 二人だけになった。

先生はワイン 私はフレッシュジュース

「イブに 乾杯」

・・・お料理はすごく美味しかった。

「先生って お給料良いんですね？」

心に浮かんだ疑問が 口に出てしまった。

だって この洋服だって 私さえ知っている有名ブランドのもの

だし、このお部屋も多分一泊何十万もするはずだ。

「ハハハ。そんなことないんだけどね。両親の遺産が少しあるんだよ。」

九条の顔が少し曇った。瑞希の知らない先生の顔……

「ごめんなさい……思い出させちゃって……」

「ううん 良いんだ。いつかは言わないといけないんだから……」

「瑞希 これ・・クリスマスプレゼント……」

九条の掌に 赤い箱がのっっていた。

「えっ でも 私 何も用意してなくて……」

自分だけが 取り残されたみたいに感じた。

「これから 一番欲しいものを貰うから 他には何も要らないよ!」

赤い箱には、ダイヤモンドの指輪が入っていた。

「先生!」

「九条光から青木瑞希に結婚を申し込む。受けてくれますか?」

「はい」

瑞希の瞳から、掌にある指輪より 綺麗な涙が溢れてきた。

星屑を散りばめたような夜景をバックに立っている瑞希を抱き締めながら、口づける。

背中に回した指でワンピースのファスナーを下げると、黒いワンピースはストーンと滑り落ちた。

ピンクのブラジャーとお揃いのキャミソール、きつとショーツも同じものだろう。

胸の谷間に小さく赤いリボンがついていた。

「フフ ほらね！プレゼントだろ？ ここにリボンが付いてる。

そんなことに 気付きもしなかった。

・・・まるで 私がプレゼントになったみたい・・・

九条の手がキャミソールの下から這上がってくる。

優しく胸を揉まれ 九条の唇が瑞希の唇を激しく吸う。

九条は違う手で、自分のネクタイを外そうとした。

すると、腰にまわっていた瑞希の細い指が、九条の襟元にのびてきた。

ユツクリとネクタイを外す。

白く細い指がYシャツのボタンをはずしていく。

・・・瑞希が 受けとるだけの愛から 与える愛を知ろうとしている・・・

俺の手によって、俺の腕の中で 開花していく少女

・・・愛しくて・愛しくて・堪らない・・・

身に付ける物を全て取り去った二人は、快楽の海に溺れていく。

体のありとあらゆる所に舌を這わせると、瑞希の口から 愛らしい
声が聞こえてくる。

何度聞いても聞き飽きることのない 甘い声

・・・俺にしか見せない切ない顔

・・・俺にだけ許された特権

二人で快感の頂点に達した時、九条自分の奥の、固く閉ざされていた
重い扉が開き始めた。

第十三話 九条の告白

「・・・せん・・・せい・・・」

どんなに感じていても、瑞希の口からは

「先生」

としか呼ばれない

「瑞希？ 名前を呼んで？」

先生じゃ

俺

いけないことしてる

みたいだ・・・」

「ん？ ひ・か・る さん？」

「そう、これからは2人の時は そう呼ぶんだよ。」

九条の指が瑞希の中を掻き回す。

「ん。・・・あ・だ・うん・・・」

「瑞希 素敵だったよ。」

ギュッと抱き締め髪の毛にキスをした。

瑞希は二度 天国に達した。艶かしい乱れた姿は 俺にしか見れない。

「 ジャグジーに入ろう。」

とろけるような快感にまだ浸っているようななまめかしい顔を 九条に向ける。

さすがは スイートだ

ジャグジーから見える夜景は絶品だった。

バスソープを入れると泡で 瑞希の体が見えない。

「プリティウーマンみたいね？」

確か リチャードギアとジュリアロバーツの甘い恋愛映画だったはず・・・

「エツ瑞希見たの？」

「うん。お母さんが大好きで 家にDVDあるから。」

「映画見たいにしてみようか？」 瑞希の提案に乗る。

昨夜は泡の中で九条が 瑞希を後ろから抱き締めていた。

今 瑞希が九条の体を後ろから包んでいる。柔らかい乳房が背中当たっている感触

「光さんに 私の元気がいっぱい 流れ込んで行きますように・・・」

・・・何だか変な感じだ・・・

今まで 「光さん」と呼んだ人は 瑞希以外に一人いた。

- ・光さん 学校に遅れますよ？・・・
- ・ハイ もうすぐ行くから。 母さん達は何時頃 行くの？・・・
- ・九時には出掛けるつもりなんですよ・・・
- ・そう 気を付けてね。 楽しんできて・・・
- ・アリガトウ。 光さんも体に気を付けるのですよ・・・
- ・何言ってるの？ 一週間で帰るんでしょ？・・・
- ・そうね おかしいわね・・・

これが最後のことばだった。

「光さんって 呼ばれたの、瑞希で二人目だ。」
九条の体を包んでいた瑞希の腕が、キュンと硬くなった。

「母だけが、そう呼んだんだよ。」
瑞希には見えない九条の瞳には、苦悩の色が映っている。

「先生？」

ギョツと回した腕を縮める。 瑞希にも、九条の苦悩がわかったよう
だ。

「俺の両親は、十年前に飛行機事故で亡くなったんだ。大学に入った年だった。」

エジプトに旅行に出掛けて、そのまま帰って来なかった。

父親は、水澤病院の院長で、経営者だった。

俺は、父親の跡を継ぐべく医学部の一回生だった。

急な院長の死に 病院側はパニックに陥っていた。

大阪市内に 新しい病院を建設していたこともあり、至急 後継者を決めなければならなかったんだ。

息子は俺だけだったし、誰もが卒業すれば直ぐに病院を継ぐものだと考えていたが、

伯父が横槍を入れてきたんだ。

卒業まで六年 一人前の医者になるまでとなると最低でも十年はかかる。

それまで、待てないと

伯父は病院の事務長をしていて 経理部門を把握していた。

そして伯父の息子である、水澤一みさわはじめが現れた。

一は 愛媛の病院で外科医をしていた。

一を院長にするために 俺は水澤の家から追い出されたんだ……

┌

絞り出すような声で、話す九条

……未だ この人の傷は癒えていない……

「俗に言うお家騒動だよ。」

親の死の悲しみも癒えぬままに、元院長派と事務長派の権力闘争

に巻き込まれ、

俺は心身共に くたくただった。

そのとき・・・」

九条が 一瞬 言葉を選んでいようだった。

・・・躊躇っている・・・

（大丈夫です。何を聞いても 私の心は決まっています。）消えるような声で九条の耳元に囁いた。

「その時 救ってくれたのが、同じクラスの青木 緋呂 君の兄さんだ。

ズタズタになった俺を、夏の間 自分の家に連れて行って、青木の御両親も暖かく接してくれた。

青木先生は、仕事柄 水澤のゴタゴタも知っていた。

何より 瑞希・・・君の存在が、俺を慰めてくれたんだ。

君はまだ、七歳だった。

小学校に入学したばかりの幼い少女だった。

何も知らない瑞希は 光君・光君といってまとわりついてくる。

夏休みの宿題を手伝って、キャンプにも行った。

そう言えば、かくれんぼをしていたら、急に泣き出して俺は驚いて抱き締めていた。

その時、初めて涙が出てきたんだよ。お葬式でも涙はでてこなかったのに・・・」

瑞希の瞳から涙が止まらない。

九条を抱いている手から指から 悲しみが流れ込んでくる。

背中に感じていた、柔らかい胸の膨らみが ヒックヒックと不規則に鳴り始めた。

「瑞希？」

体を入れ換えて、瑞希の顔を覗きこむ。

ポロポロと溢れだす涙

「先生・・・」

感情が言葉にならない。

瑞希の腕が九条の頭を 抱き包んでいる。
自然と九条の唇が瑞希の鎖骨に触れる。

「ごめんなさい。何も知らなくて。忘れていたことも・・・

どうして忘れていられたんだろう。 約束もしていたのに・

「

「約束？」

・・・?????・・・

九条には 全く覚えのないことだった

「でも せ・あっ 光さん？名字違う・・・もしかして結婚？してるの??？」

「ばか！正真正銘の独身です。

九条は母の実家の姓なんだ。 医者を目指していれば、どうしても水澤の名がネックになる。

それほどまでに、水澤のお家騒動は有名だったからね・
もう、これ以上彼らに振り回されるのは 嫌だったんだ。

だから、母が亡くなって継ぐ人のいなくなった九条の姓を 俺が
継いだんだ。」

「そうだったんだ・・じゃあ 光さんはお医者様なの？ 先生じ
やなくて？」

「はははは。そうだよな。おかしいよな？」

一応、医者免許は取ったんだ。両親の願いだつたし。

でも、京都で医者をする気持ちにはどうしてもなれなかった。

青木先生は、自分の病院に来て欲しい・・と言ってくれたんだけ
れど・・

甘えているみたいだね。

だから、教授に頼んで教職課程を最短で取らせてもらい、数学の
教師になったんだよ。

元々、医学より数字に興味があったからね・・」

「瑞希？ どうした？ 顔が赤い・・のぼせたのか？」

「なんだか、くらくらするんです・・」

「もう バカだな・・」

瑞希を抱き上げ、寝室に向かう。

乱れたままになっていた、ベッドの中に寝かせ、ミネラルウォーター
を飲ませた。

「大丈夫か？」

「うん。ちよつとのぼせちゃったみたい・・」

「苦しかったら 早く言わないと・・」

「ごめんなさい。」

九条の腕枕は 少し堅くて、横を向くと先生の胸板がすぐ目の前にある。

なんだか すごく幸せな気持ちになって 先生の胸に顔を寄せた。

「ん？ どうした？」

「先生？ 約束・思い出した？」

・・・あ・・・

「忘れてるでしょ！」

「ごめん。思い出せない。何の約束をしたっけ？ 教えて？」

「もう。大切な約束なのに・・・忘れちゃうなんて・・・信じられない！」

「でも、瑞希も忘れてただろ？」

「でも ちゃんと思いついたもん。」

「うー許して 何でもするから・・・」

「ほんと？ 何でもしてくれる？」

「こら。 いい加減言わないと 襲うぞ」

「仕方ないな・・・ あのと看、光君のお嫁さんにしてね？って言ったの

そしたら 先生は 約束だよって、

大きくなったら 綺麗な瑞希を貰うよ って約束した

んだよ

九条の身体中が 優しい光に包まれていく

十年前から、この少女は 俺の光だった

涙が出てきそうになって、つい意地悪を言ってしまう

「何だよ。それなら、ちゃんと約束守ってるだろ？」

高校を卒業したら、瑞希は晴れて九条光の妻になるんだから・
」

「だって・・・」

「だってじゃない・・・」

・・・ん・・・何か言いそうになった瑞希の唇を九条の　それがふさいだ

・もう一回しようか・・・

第十四話 発覚

「甘い甘い夜が、過ぎた後

二人の間には確固たる約束が生まれた。

* * * * *

「ただいま」

九条が青木家に瑞希を送って行くと、そこには 両親と兄が待っていてくれた。

先生と兄貴が 握手をし肩を抱き合う。

「元気だったか？」

「ああ お前も元気そうだな？まだ 向こうでの仕事は残っているんだろう？」

「ああ でも、母さんにお前と瑞希の事を聞いたら、いても立ってもいられなくてさ！

無理を言っで一足早く正月休みをもらったよ。

だから、正月は当直だ！」

「そうか・・・ありがとう。」

「瑞希、綺麗になったな？ 夏に見た時とは別人だ。」
目を細めて 瑞希を見つめる緋呂の目は、父親と同じ保護者の物だ。

「お母さんも 知ってたのに どうして教えてくれなかったの？

九条先生が あの光君だったって・・・」

プーと頬を膨らませ すねている。少し前はそんな女の子らしいし
ぐさも影をひそめていた。

そんな娘を父親は複雑な気持ちで見つめていた。

・・・手放したくない。

けれど瑞希には この青年が一番似合っている。

他の誰でもない。今は九条という名になった青年が この子を
守ってくれるのだ。

私が三十二歳の時長男が生まれ、二人目を諦めていた頃 十歳
違いで瑞希が産まれた。

目のなかに入れても痛くないぐらい可愛い娘だ。なに不自由なく
過ごせるように、守ってきた。

妻から 光の話を聞いたとき、先ず始めに浮かんだ言葉は・
離れていく・・・と いう寂しさだった。

光は 初めから

「結婚を前提にお付きあいさせて下さい。」
と妻に話したという。

青木瑞希の名は知っていたが、まさか十年前のあの少女だと

は思わなかったと。

それほどまでに、瑞希の雰囲気は変わっていたのだ。痛々しいぐらいに・・・

送って来たとき、始めて瑞希が青木家の娘だと判ったらしい。

彼は、運命だと 言った。

運命の人を見つけてしまったからには、手を離すことなど出来ないといと。

もう あの頃の傷付いた少年はいない。大きな羽を持つ大人の男になっている。

「あなた・・・何 浸ってるんですか？

光君が 正式に貰いに来てくださったのですよ。

花嫁の父の心境になるのは 未だ早いですよ。」「
現実的な妻には いつも頭が上がらない。

外見は、上品な奥様だが芯は鋼の様な強さがある。

守ってやらなければ・・・と思ったのは確だが、最近はこちらが守られている気がする。

「まだ 早いんじゃないか？大学を出てからでも遅く無いような気がするのだが・・・」

「何言ってるんですか？

私達だって私が二回生の時に結婚したんでしょ？

うちの父は今のあなたと同じことを言ってたわよ。

まだ早い　　って　　フッフ

そうなのだ。

青木夫妻も青木婦人が二十歳になるのをまって結婚していた。

大学卒業の時はお腹に　緋呂がいたのだ。

「申し訳有りません。

私は、明日にでも籍を入れたいところなんです、瑞希さんの受験もあることですし、卒業を待って入籍させて頂だければと思っています。

急な事なので、式場が間に合わないかもしれませんが、出来るだけ早く式も挙げたいのです・・・」

先生が私との結婚を両親にお願いしている。

・・・すごく不思議な光景・・・

「親父諦めるよ。　母さんに任せておけば大丈夫だって。

それより、光が息子になるんだぜ。親父にとっては万々歳だろっつ？

俺が右腕なら　左腕が出来たんだから・・・」

緋呂の言うことは最もだ。

「そうか　　そう考えれば良いんだな！　息子がもう一人出来るんだな！」

「もうお父さん 歳じゃないの？」
余りに嬉しくて、からかってしまった。

先生は明日 仕事があるからと、夕飯を食べて自分のマンションに帰って行った。

・ ・ 離れたくない ・ ・

・ ・ ・ 本当は一緒に行きたい ・ ・ ・

瑞希の心も 体も そう感じていた。

* * * * *

九条は、自分の机の引き出しに 退職願を直した。

日付だけを書かずに書いておいた其に、今 日付を入れる。

『平成十九年三月一日』卒業式の日付だった。

冬休みに入った学校は静かだ。

雑務に追われて出来なかった仕事を片付けていると、教頭が呼び
きた。

理事長室のドアを開けると、三名の理事と校長、教頭もいる。

「九条先生 其処へ座って下さい。」

教頭の口調がいつもよりよそよそしい。

「はい。」

校長が口を開いた。

「昨日はどちらにお出掛けでした？」

「はあ？クリスマスなので友人の家に行っていましたか？何か？」

「……まさか 生徒とHをしてました。 などと言えるはずはない。」

「そのご友人とはどなたか、お名前は言っただけませんか？」

「プライベートな事なので……」

（……まさか……）

「昨日、先生がホテルから出てくる所をある生徒が見てしまいましたね。」

お母様に話したそうなんです。 そのお母様から こちらの和泉理事の方に連絡がありまして、少し 事情をお聞きしたいと 御足労願ったわけです。」

（やはり、誰かに見られていたのだ。）

「何方と一緒にだったのですか？」

「フィアンセです。」

「えっ！」

「婚約されているのですか？」

（実際は 昨日婚約したのだが、別に良いか。以前から婚約していた ということでも・・・）

「はい。卒業と同時に式を挙げる予定ですが。何か？」
明らかに 老人達は動揺している。

「あつ いや そうなんですか？まさか 内の生徒が婚約者だとは思いませんでした。」

「申し訳ありません。彼女とは、許嫁の間柄だったもので、まさか私がこの高校の教師になるとは思いもよらなかったものですから。」

それで、ここへ来るときは随分悩みました。

鼻屑をしてしまうのではないかと、何より関係が判った時に理事長先生に御迷惑をおかけするので はないかと。

しかし、恩師の顔に泥を塗る訳にはいきません。学校では、知らん振りをして参りました。

昨日は、高校最後のクリスマスだと言うことで、一日だけお祝いをしたのです。

K大の受験がありますので、これから三ヶ月は浮かれてはられないものですから。」

九条の半分嘘の話を、彼等は納得していた。

無理を言っ て来てもらった教師なのだから・・・

「では、青木瑞希は受験をするのですね？」

「当たり前です。彼女は其のために学んで来たのですから。」

「九条先生が教えてきたのですか？」

「申し訳ありません。彼女をK大に入れることが、この学園への恩返しになるかと思ひまして。」

プライベートな時間に彼女の家で苦手科目を少し教えていました。

「

「そうでしたか。青木君は、我が校始まって以来の秀才ですから、我々としても期待をしているんですよ。九条先生が付いているのであれば合格間違いなしですね。いやぁ心配してたんです。九条先生は中々おもてになるし、一緒にいた生徒が生徒会長の青木と聞いたときは・・・受験前なのに因りにも因ってホテルだ何て 九条先生も 困ったもんだとね。」

ちやっかり、嫌味を言うのを忘れない。

・・・狸め・・・

「私達を見た生徒のことなんですが、くれぐれも他言無用と釘を刺しておいて下さい。私達も学校では、今まで通り他人の振りをするつもりですから。」

九条の言葉にホツとし、告げ口した生徒と母親には口止をすると和泉理事が約束した。

馬鹿な我儘な生徒の為に、優秀な教師と秀才を失うことなど理事長は考えたくもなかったのだ。

正月は大晦日から青木家に泊まり、久々に家庭の味を満喫していた。お節料理は十年た振りだ。

瑞希も受験勉強の傍ら、母に作り方を教えて貰っていた。

花嫁修行の予行みたいなものだろう。

九条の悩みは、やはり新学期に学校で噂になっっているのでは？ということだ。この事は、青木夫妻にも瑞希自身にもまだ、話していない。

九条の決意は既に決まっているからだ。

しかし、瑞希には伝えておかなければいけないと考えていた。何の悲しみも彼女に与えたくないのに。・初詣には二人で北野天満宮に合格祈願に出掛けた。瑞希は母親に勧められて、着物を着ていた。

薄い桜色の小紋に 朱の入った帯が良く似合っている。

瑞希は 恥ずかしそうに玄関から顔を出した。

「変じゃないですか？」

「ううん 似合ってる。」

「久しぶりだから、何だか スースーして変」白いうなじが、色っぽい。

男の欲情を唆る。

「瑞希 色っぽいよ。他の男に見せたくない程だ」
息が掛るぐらい耳元で囁いた。

「もう 先生のバカ・・・いやらしいんだから」

憎らしい言葉を言っているが、瞳は 潤んでいる。・・・多分 潤んでいるはずだ・・・

車の中で、瑞希に噂になるかも知れないと 伝えた。

学校では、今まで通り知らん顔をするけれど、我慢して欲しいと。

「どうしよう。先生に迷惑かけちゃいたね。ごめんなさい。

別々に出れば良かったのに。私 何も気付かなくて・・・

私は大丈夫ですよ。何か言われても、知らん振りするから。

それに、内部に進学する子なんて、『学校なんて、もう行かないよ！』って言っていたから・・・

クラスの半分以上は、登校してないから。キット・・・」
健気に励ましてくれる瑞希の優しさが、愛しい。

瑞希に言われると、何だか本当に大丈夫な気になって来るから不思議だ。

「ねえ。瑞希。帰りにしたいな？」

「えっ」

「瑞希の着物脱がせたくなくなってきた！」

「ええー もう先生・H」

瑞希が桜色に染まっている。

「あっ でも 着物脱がせたら、着付け出来ないな？」

「この着物ぐらいなら自分で着れる・・・」
消えるような声で、瑞希が呟いた。

「着付け習ってたの？」

「十年間 日舞習ってたから・・・」

「じゃあ 決まりだな」

九条の瞳に妖しい笑がニヤリと光った。

第十五話 嫉妬

新学期に入り予想通りとは言え、クラスは半分以上空席だった。

受験組の生徒だけが 来ているみたいなものだ。その為、授業はほとんど自習。

瑞希は、教室で物理の問題集を問いていた。

「青木さん ちょっと良いかしら？」

幼稚園からの内部生の 確か 杉下梨花さんだ。

彼女と話したのは、六年間で初めてだ。

「何か？」

無愛想に返事をする。

「お話があるの。着いて来てくださる？」

仕方ないから、梨花に付いて廊下を歩いていく。

屋上には プールがあり、今の季節 訪れる生徒はいない。

屋上には、同じ内部生の 川嶋彩と 瀬川萌がいた。

・・・一体、何の用なんだろう・・・

「青木さん 九条先生とお付きあいしていらっしやるの？」

顔は笑っているが、目には険悪な光をたたえている。

「はあ？」

「お2人をお見かけした人がいらっしやるの」

・・・この人達の誰かに見られたのだろう・・・

「イイエ。何を言い出すかと思ったら・・・私は誰ともお付きあい
していません。」

今はそれどころじゃないの。」

・・・嘘ではない・・・ お付きあいしているのではない・・・ 婚約
しているのだ。

「そうなの？ お勉強も大変ね。」

軽蔑の眼差しで 瑞希を見つめているのは、川嶋彩だ。

（瑞希は直感で 先生の言っていた生徒は彼女だと 判った。）

川嶋彩は 去年のクリスマス、交際しているIT社長にリーガロ
イヤルのモナークスイートをおねだりした。ところが、先に予約が
入っていたらしくクラウンスイートにランクを落とすのだ。

ランクを落とすことに我慢が出来ない彩は 誰がスイートに泊ま
っているか知りたくて仕方がなかった。

彩の機嫌を取るため、IT社長はいくつかのブランド物のプレゼ
ントを用意しなければならなかった。

欲しかったCHANELのジャケットを手に入れ 彩の機嫌は良
くなったように見えたが、そのスイートから出てきたカップルを見
てしまった瞬間 凍りついた。

・・・どうして、九条先生と生徒会長が・・・

それも、先生はその生徒の腰を抱いている。

明らかに、2人の親密さを表している

彩は、九条がこの高校に来たとき、色仕掛けで誘惑しようとした何人かの生徒の一人だ。

こっぴどく振られ、自尊心も傷つけられた。

『お前のような女には欲情しない』と言われた。

女の価値は、化粧の上手さと男に甘える仕草で決まると思っている彩だ。

初めて九条を見たとき、180cmを越える長身と大人の色気が見え隠れする涼やかな眼差しに、心を奪われた。欲しいものは全て手に入ってきた彩だ。

努力しなくても、いつの間にか自分の思うようになっていく。

だから九条が自分に靡かなかったことよりも、自分以外の女生徒に好意を持ったことが許せなかったのだ。

「だったら見間違えたのかしら？青木さんに良く似ていらしたから・

でも考えればそうよね？先生が貴方のような堅物に手を出すはずはないのにな。

「ごめんなさいね。お勉強の邪魔をして・・・」

すーっと彩の手が瑞希の肩に触れそうになった。と思った瞬間、ゴンと後ろに押されバランスを失った体は冷たいプールの水に吸い込まれていった。

「キヤアー」

「ハハハ 身のほどをわきまえないからよ」
と笑いながら二人の少女を従えて、階段を降りていった。

ずぶ濡れになった瑞希は 保険室で体操服に着替え濡れた制服を袋に入れ 教室に戻った。

教室には もう誰もいない。

悔しくて 悲しくて 涙が溢れてきた。

泣いちゃいけない。

負けになるから。

けれども、グツと堪えた胸の奥から嗚咽が溢れる。

職員室では、養護教諭が他の女性教師に向かって話していた。

「今頃 青木さんもどうしてプールの側なんかに行ったのかしら？」

滑ってプールに落ちちゃったらしいの。

ビックリしたわよ。 ずぶ濡れで保険室に入って来たときは・・・」

・・・ガタン・・・九条のイスが音を立てて倒れた

青白い顔をした九条の足は、職員室から離れるに従って徐々に速くなっていく

薄暗い教室に 鼻水を煤る音がする。

「瑞希」

「せん・・せ・」

濡れたままの瑞希の 頭を抱き締め

「ごめん」瑞希は首を横に振った。

「誰にやられた？」

またもや首を横に振る。

「ごめん。ずっと守るって約束したのに・・」

「ううん。大丈夫・・信じてるから・・大丈夫・・」

私が先生を好きな気持ちは・・誰にも・・止められないから」

・・愛しい・・こんなにも一人の女を愛することが出来たんだ・・」

第十六話 桜 咲く

表向きは、受験に専念すると言うことで瑞希は 学校を休んでいた。瑞希の性格では、最後まで登校したいと訴えたのだが、九条がガンとして受け入れなかった。

先日の様な 隠謙な嫌がらせが有る限り 瑞希を登校させることは出来ない。と言うのだ。

瑞希は大丈夫だーと言っても、いつもは優しく瑞希の希望を叶えてくれる九条が認めてくれない。

九条にとって瑞希はたった一人の家族になるのだ。自分が守らなくてどうする？

家族

俺が 十年前に無くした物

瑞希に会うまでは、自分の手に入るとは思わなかった物

だから、誰にも邪魔はさせない。

瑞希を 傷付ける者は女であろうと男であろうと 許さない。その為に、今 自分がすべきことは・・・

九条の意思は決まっていた。

教師と生徒　との間にある　境界線を越えた時から、決意して
いたこと。

センター試験が済み、二次に向けての追い込みに入っていた。

瑞希の選択肢の中には、私立大学の受験も有る。関西から離れな
いということは、家族の中では暗黙の了解だった。

D大とR大を受けるつもりだが、その為の勉強はしていない。

あくまで、K大に行きたい・・・　瑞希の望だ。

結婚が決まっているのだから、上の大学に自動的に上がり、花
嫁修行をすれば・・・と　母に言われたが、瑞希にとって　前からの
目標を簡単に捨てること等出来ないでいた。　彼女の良い面でもあ
り、悪い面でもある。

瑞希の二次の当日　九条に付き添われてK大に着いた瑞希は、先
生と離れて教室に入った。　昨夜　九条に愛された余韻が体に残っ
ている。それだけで、余裕が出てくる。

「おまじないだよ。」

と瑞希の身体中に　キスの雨を降らせる。

胸元に付けられた、キスの花は　薄紅の桜のように咲いている。

・・桜
咲く
・

予感がした

第十七話 爺の願い

瑞希の二次に向けての対策をしている九条のところへ、長谷川から電話が入った。

『長谷川』水澤の家で、祖父の代から使えている執事だ。父も俺も『じい』と呼んでいた。

「お久しぶりですございます。お坊ちやま。」

「爺か。元気にしていたか？皆は変わり無いか？」

水澤の家に使えていた人達は、俺が十年前に家を出る時に 俺が水澤と縁を切るという条件で今まで通り、水澤に務めていた。彼等は、既に再就職等出来ない年齢だったからだ。

「爺はいくつになった？」

「はい。もう七十七になりました。」

「そうか！喜寿だな。志保はどうしてる？」

兼田志保 長谷川と同じく水澤の使用人だ。留守がちだった母に代わり 俺の乳母同様の人だ。

多分 七十は超えているはずだ。

「はい。最近持病の腰痛が酷くなってきたらしくて愚痴っぽくなっています。結構元気になっています。」

「そうか・・・体にはくれぐれも気を付けるように伝えてくれ。」

「はい。伝えておきます。志保も喜びます。」

坊ちゃん 今日はお願いがあってお電話したのですが？」

「ん？」

「水澤の事で 坊ちゃんに願いがあって・・・明日にでもお時間取

って頂けませんか？」

深刻そうな長谷川の声に、九条はただならぬ気配を感じていた。

翌日の夕方 九条のマンションには長谷川の姿があった。

「お忙しいところ 申し訳ありません。折入ってお願いがあります。 坊ちゃん。」

水澤に戻って頂けませんでしょうか？」

「なに？」

「じいの最後の願いでございます。 水澤に戻って頂きたいのです。」

九条にとって 晴天の碧れきとはこの事をいうのだろう。 思ってもいないことを 持ち出された。

「爺 それは無理だ。今の水澤は 俺の知っている水澤ではない。

それに、水澤の伯父が認めるはずなどないではないか？」

「では坊ちゃん。 水澤理事長が認めれば、戻っていただけるのでしょうか？」

長谷川の顔は、必死な形相をしている。

・・・水澤にいったい何があったのだ。

「今の水澤は もうどうにもならない状態になっています。 経営の詳しい事は爺には分かりませんが、水澤理事長の表情は日に日に険悪になって来ております。」

昨日など、院長に向かって怒鳴り声を上げておいででした。何度か、医療ミスがあったみたいです。

それを揉み消す為に、多額の費用が必要になり、経営を圧迫しているらしいのです。

それに、そのような悪い噂は必ず広まるものです。

段々 患者数も減少し、下手をすれば水澤は潰れてしまいます。

だから・・・おねがいです。水澤に戻って頂けませんでしょうか？」

「何を 言うんだ。 もう俺は 医者ではないんだよ。 四年も医学から離れているんだ。」

もう戻ることは・・・無い。」

「坊ちゃん」 泣き出しそうな顔をして、長谷川が悲しい悲鳴をあげる。

「これだけは俺だけの裁量で 出来ることでは無いと思う。 爺すまない。」

一度 医学部時代の友人に 聞いてみるが、俺に出来る事はもう無いんじゃないかと思うんだよ。」

「坊ちゃん・・・」

長谷川の話聞き、俺は青木院長に電話を入れた。

「もしもし 九条です。 お仕事中に申し訳ありません。 折り入って

お聞きしたい事がありました。」

「光君が私に電話をかけてくるのは、初めてじゃないかい？」

「はい。少しお時間を頂きたいのですが・・・」

「瑞希のことではないみたいだね？」

「はい。」

「今から昼飯を食べるんだが、一緒にどうだい？」

「・・・有難い・・・話を聞いてくれそうだ・・・」

「はい。そちらに・・・」

「いや。『尾崎』に来てくれるかい？蕎麦でも食おう。」

『尾崎』に着くと、離れに通され、既に青木院長は座っていた。

「時間がもつたないから、食べながら話そう。蕎麦で良いかい？」

「はい。」

青木は、蕎麦懐石を注文し、九条の話を聞いていた。

九条は長谷川から聞いた話を、かいつまんで話した。

「やはり、そのことだったんだね。」

君からの電話で、何と無くそう感じていたんだよ。」

「はい。水澤の様子をお聞きしたいと思ってます。」

「確かに長谷川から聞いた通り水澤の経営状態は良くない。危機的状況にあると言っているだろう。」

内情は判らないが、余り良い噂は聞かないな。医師の質が悪い。水澤の患者がうちにきて再手術することも何件かあるんだよ。看護師の回転も早いみたいだから 居着かないんだろっ?」
水澤の話をする青木の顔は、苦渋に歪んでいた。

「私はどうすれば良いのでしょうか?」

素直な質問だった。

「難しいね。」

君はもう水澤の人間ではない。しかし、水澤の血を受け継ぐ唯一の人間だ。

私達がどうこう言うことでは無いが、瑞希の父親としてではなく医者としての意見として聞いてくれ。私としては、君が医師として復帰してくれたら・・・と願うよ。優秀な医者は そんなに多く無いのだからね。」

「買い被りです。私は、実践の経験をしていません。今更 戻っても役に立つとは思えないんですが?」

「確かに 君に実践経験は無い。しかし、君の医師としての能力は学生時代に証明済みだ。」

息子の緋呂は 君のような腕が自分になれば・・・と嘆いていた。」

自分の能力を評価してくれることには感謝すれど、やはり自信は無い。

「考えてみたまえ、君はまだ二十八歳だ。医学部に四浪をして入った人間と同じなんだよ。」

医学部には珍しいことではないはずだ。」

確かに、九条が在学中でも同級生に三歳も四歳も年上の人はいた。

・・・しかし・・・

九条は、この三月で今の学園を退職しようと考えていた。
瑞希を連れて、アメリカへ留学するのも良い　と考えていた。

しかし、復帰するとなれば　留学どころではなくなる。

「それに、君が水澤に戻るのであれば、うちから医師を派遣してもいいと思っている。」

「えっそれは・・・」

「君が戻らない水澤には、何の魅力も無いが、君が戻るとなると話は違ってくる。」

後ろ立てになっても良いと考えているんだよ・・・」

「先生・・・そこまで・・・」九条の目には　溢れる光が満ちていた。

「瑞希の旦那様なんだから、それぐらいは当たり前だろうっ?」

「先生・・・すみません・・・」

「君が水澤を捨て切れないように、私たちは医師としての君を捨てきれないんだよ。」

「・・・」

「君は、私の息子になるんだから・・・」

第十八話 決断

瑞希の卒業式の二日前

水澤の伯父が九条を訪ねてきた。

「光君。すまない。長谷川から聞いてくれてるだろうが、水澤に戻ってくれないか？ 頼む。」

あれほど、光を排除しようと企んでいた伯父は、見る陰もなく消沈していた。

二周りも小さくなってしまったようだ。光が知っている頃の伯父より、二十歳も老けたみたいだ。

「私に話すように、長谷川に頼んだんですか？」
どうしても口調が険しくなる。

「あ・いや・そんなことは・・・」

・・・そうだな。長谷川に話せば君に伝えてくれるだろうと 考えた事は確かだ。

もう、私にはどうすれば良いのか判らないんだよ。」 悲壮な声が絞り出された。

俺を水澤から追い出し、父の病院を乗取った憎い伯父。

しかし、今の姿を見せ付けられたら恨み言など ぶつけられない。

「今の負債は幾等あるのですか？」

「五億だ」

「それぐらいなら、どうとでもなるでしょう？」
負債としては、いくらでも返せる金額だ。

「もう、銀行が貸さないんだよ。余りにも悪い評判が立ちすぎた。

」

伯父にとっては、意気揚々と掲げた長男だ。

その息子の無能さを、自らの口で暴露しなければいけないのだ。

・・・苦悩は如何程の物か・・・

「しかし、もし私が戻ることとなったら一君には辞めて貰うこと
になりますよ？」

よろしいのですか？」

光にとつても、同じ道に進んだ三歳上の従兄弟の存在はかけがえの
ないものだった。

しかし、たった十年で水澤をどん底まで落とした責任は、取って
貰わなければならない。

「それは、仕方がない事だ。 あいつは、器では無かったと言っ
とだ。

私は、親子の情に流され息子の無能さに気付かなかった。 ア
イツにトップにならせようとした親心 が仇となったのだ。 すまな
い。」

プライドの高い水澤の伯父が始めて頭を下げた。 心なしか 肩が震
えている。

「伯父さんの心は判りました。 けれど、もう少し時間を下さい。」

「すまない。 良い返事が貰えることを期待しているよ。 光君 本
当にすまない。 助けてくれ。」

「はい。考えてみます。」

次の日、九条は瑞希を自分の部屋に呼んだ。

「先生？何かあったんですか？ 明日まで忙しいから逢えないよってこの間言ってたのに？」

瑞希は 二次試験も済み、後は卒業式と発表を待つのみだ。
家で、母に付いて料理や家事全般を習っていた。いわゆる、花嫁修行だ。

今まで 勉強しかしてこなかった少女なのだからそれらに対しては、全くの素人なのだ。

三月の末には 母の元を離れる娘の 数少ない触れ合いの機会を九条は奪っている。

・・・悪いことをしたな・・・

「いや。瑞希には 一番最初に話しておきたかったんだよ。」

??? 首を傾げる表情が 愛らしい。

「明日の卒業式で、学園を辞めるつもりなんだ。」

この間 長谷川が来て水澤に戻ってくれと行ってきた。」

「先生？先生はお医者さまになるの？」

先生の白衣姿 カッコいいだろうな。 他の人に見せたくない

ぐらいカッコ良いと思うの。

前から、先生がお医者様に戻ってくれたらいいのにな？って思ってたの。うふふ。

神様が、聞いてくれたのかも知れないね？・・・」

瑞希の瞳には、笑みが溢れている。

・・・この子は 俺の本心を導き出してくれる。

過去の憤りで凝り固まったプライドを いたも簡単に打ち砕いた。

瑞希のために、医者に戻ったんだと自分に対して言い訳を出るように 道をつけてくれる・・・

「本当に、医師に戻っていいのか、本当に悩んだんだ。俺には実績が無い。

やはり、四年のブランクは大きいんじゃないか・・・と。

青木院長に相談して、力になってくれると言ってもらった。先生には、どちらかに悩んだ時は望まれるほうを選びなさい といってもらった。ただ、今の水澤には以前のような信用が無い。

そんなところに、復帰するとなると、瑞希にも苦勞を掛けてしまふんじゃないかって・・・思うと・・・」

瑞希の頬が桜色に染まっていた。 嬉しかったのだ。

「先生。 嬉しいです。 私を一人の女性として扱ってくれて。

あたしのために、水澤に戻ってください。」

「ありがとう。 瑞希に許しを貰って安心したよ。

暫く、青木先生の病院で研修を受けさせてもらうことになったんだ。

だから、これからは忙しくなると思う。

明日の卒業式に、みんなに話すから・・・学園を辞めることも、瑞希との結婚も」
そう言つて 瑞希を後ろから抱き締めた。

「先生？結婚は もう少し後でもいいんじゃないですか？」

「エッ？ 瑞希はしたくないの？」

九条は瑞希を不安にさせたのかと動揺していた。

「ううん 私は今日からでも帰りたくないけど、先生はこれから
凄く忙しくなるでしょう？」

お父さんの病院で少しの間 研修に入るんでしょう？

学校との引き継ぎとかも大変なんじゃないですか？ 私 先生

のお荷物になりたくないから・・・」

瑞希の髪に口づけて、優しい声が出てくる。

「そんなこと言わないで。俺も瑞希を帰したくないよ。 瑞希が家で待っていてくれるだけで、

俺は頑張れるんだから・・・

それに、水澤の家からなら瑞希の大学にも近くなるし 仕事帰りに寄ることも出来るだろ？

入学式には 九条瑞希で行こうな。」

第十九話 卒業

その日は、雪だった。

母さんの車で、学校の門をくぐり講堂まで傘をさして歩いた。先生は今朝早くに学校へ行き、多分校長と教頭に話をしているはずだ。

「瑞希！帰りは光君と一緒に帰るでしょ？」

「うん。いい？」

「でも、お泊まりは駄目よ。今日はお祝いだから、お父さんも緋呂も早く帰って来るから。光君も一緒にうちに帰って来なさいね。」

「はい。ありがとう」

母と別れて、瑞希は教室に入って行った。

ザワザワしていたクラスメート達が、瑞希に注目している。

どうしたのかな？

「瑞希！試験どうだったの？」

仲の良い沢尻結花と広沢涼子が瑞希の側の椅子に腰掛けた。彼女達は、エスカレーターで上の女子大に上がる。

「うん。未だ判らないの。後五日で発表だから・・・」
曖昧な笑みを浮かべて応えた。

「ちょっと小耳に挟んだんだけど、瑞希 最近彼氏出来た？」

結花が 好奇心満々の瞳で聞いてきた。

やっぱり二人の耳にも入っているんだ。

「どうして？」

「瑞希が 九条先生と付き合っているって、噂が流れてるのよ」
涼子が探るように聞いてきた。

どうしたら良い？

はなした方がいいよね？先生と話し合った事だ。自分の口から友達に伝えようと・・・

「実を言うと・・・付き合っていると言うより・・・」
クラス中の耳が、瑞希の言葉に注目している。

「婚約したの。」

一瞬の静寂の後、

エー っと叫び声が上がった。

遠巻きにしていたクラスメートが一瞬にして、瑞希の回りに集まってくる。

「いつの間に そんなことになってたのよ？瑞希そんなこと全然言わなかったじゃないの！」

非難を込めて、結花が問いつめてきた。

・・・だよ。私だって、この六ヶ月間の展開には驚くばかりなんだから・・・

先生と打ち合わせしたように応えないと・・・

「先生とは昔からの知り合いだったの。兄の同級生で、良くうち遊びに来ていたのよ。でも、生徒と知り合いなんて話ちやうと授業がやりにくくなるから 黙っておいてくれて頼まれていたの。」

「で、どうして婚約なんて事になっちゃうの？」

皆は、それを知りたいのだ。だって、恋愛だけでも浮き浮きなのに、年上の先生との恋愛だ。ましてや、婚約だなんて・・・

有り得ない！

それも、優等生の瑞希と 冷血感の学校で一番恐い九条先生なのだ。

「約束だから！十年前に約束したから・・・」

「十年前って言ったら瑞希まだ小学校低学年何じゃない？」

もちろんクラス中の女子生徒は全部そうだ。

「うん。」

その時の約束を先生が覚えていて・・・ 何だか知らない内にうちの両親と話が済んでいたのよ。」

「っていうと、俗に言う許嫁？」

「みたいかな？」

『げー！』

江戸時代じゃないんだから許嫁って、いくらお嬢様の多いこの学園でも有り得ないよ！

、流石に女子大になると婚約している人も結構いるらしいけど、高校で婚約だなんて・・・

雑踏が担任の登場で、一気に静かになった。

粛粛と卒業式が進んで行く。

在校性の送辞の後、瑞希が卒業生代表として答辞をよみあげた。

「私達は未だ未熟です。けれど、両親の愛情と先生方の暖かく厳しい御指導を受けここまで過ぎて参りました。これからは、各々の道に進み幾多の困難に立ち向かわねばならない時もあるかと思いません。苦しい時や悲しい時は、優しくった先生方のお言葉を思いだし、励みにしたいと思えます。

いつか、遠くない未来に人生のパートナーを見つけ幸せに成ることをここに誓います。ありがとうございました。

卒業生代表 青木瑞希

第二十話 雪の朝（前書き）

一部過激な性描写有りますので、苦手な方はご遠慮ください。

第二十話 雪の朝

卒業式の終りに、九条先生の退職の挨拶があった。校長と学園長は苦い顔をしている。九条先生のような優秀な教師を 離したくないのだろうか？

けれど 九条先生の決意は堅かった。

式の後 少ししてから九条先生が瑞希のクラスにやってきた。

瑞希を連れに来たのだ。

「きゃー 瑞希！ 先生が迎えに来たよ！」

クラスが騒然となっていた。担任に会釈して、いつものクールな先生が廊下に立っている。

窓からは、そんな先生を見ようと卒業生がキヤーキヤーと 顔を輝かせて頭を出している。

「先生 おめでとう。結婚するんでしょ？」

一人の生徒が声を掛けた。

「ありがとう。そうだよ。やっとね！」

この世の春だという顔にはにkind笑顔が浮かんだ。

「キヤー」

今まで 九条先生が学校で見せたことのない表情

クールな怖い数学教師の仮面を取り去った九条。

生徒達は、一番怖い先生がこんなにかっこいい青年だと初めて知ったのだ。最後の挨拶をして ホームルームが終わった。クラスの半分以上が上の女子大に進学するため、他校の様に式の後で写真を撮り合ったり涙にむせぶような光景はここには無い。

殆んど生徒が親の車に乗り姿を消す。まれに恋人が迎えに来て

いる生徒もいるが、それらは極　まれだ。

「瑞希　帰ろう。」

九条が教室から出てきた瑞希の手を握り、女子生徒達の好奇心の渦が溢れている廊下をスタスタと歩いていった。

「先生　恥ずかしいから、離してください。」

真っ赤になって顔を上げれない瑞希が　泣き言を言う。「いやだ。

今まで学校ではずっと我慢していたんだから。　もう、教師と生徒じゃないんだから！」

確かに学校での先生は、もう少し優しくしてくれたら良いのに？と　思える程、瑞希に対しても厳しい姿勢を貫いていた。

そんな九条に瑞希は少し寂しく感じ、普段の優しい先生とのギャップに戸惑っていた。

もう　これでコソコソする必要なんてないんだ！

夜は瑞希の家で、卒業のお祝いの食事会がある。もちろん九条も一緒だ。だから、お昼は先生と二人でゆっくりお祝いしようと話していた。最近オープンしたイタリアンのお店に連れて行って貰おう。瑞希の着替の為　一度先生のマンションに立ち寄った。

着替えの服を持って寝室に入った瑞希の後に続いて九条がドアをしめる。

「先生？　もう着替えるんだから」

これでは制服を脱げない。

「瑞希の制服姿を見るのも今日迄なんだから　もう少し見せてく

れよ？」

九条の瞳が妖しく光った。口元がニヤリと嫌らしく笑う。

「制服姿の瑞希を抱きたい・・・」

九条が瑞希を後ろから抱き締めながら耳元に囁いた。

ゾクゾクと脳髓が痺れる。それだけで溢れてくるのがわかる。「

いやん・・・だ・・・め・・・あっ・・・」

先生の冷たい唇が瑞希のうなじを這う。右手は制服の下から薄いキヤミソールをたくしあげ器用にブラのフオックを外す。もうすでに上を向いた突起をコリコリと転がすと、瑞希の口から切ない鳴き声が漏れる。

「・・・ん・・・い・・・や・・・あ・・・」

片方の手はスカートを撒くし上げショーツの上から その花弁を撫でつける。溢れすぎるほどに潤っている蕾を強く押すと、瑞希の体がピクツと跳ねた。

制服姿に興奮する男の気持ち少しわかる。 背徳の意識に際

なまれ 無茶苦茶興奮している自分がいた。

『これは 堪らない。抑制出来ない。』

始めは、ちよつとした悪戯心だった。

瑞希にちよつと意地悪をしてみようと思っただけだったのだ。

しかし、この姿は欲情する。今まで制服姿の瑞希は 自分の生徒だった。だから、いくらその姿を見ても理性が働き他の生徒と同じようにしか思えなかったのだ。それが、今日 自分の生徒ではなく なった瑞希がいる。

制服姿に違いは無いが、九条の気持ちが違っていた。理性という糧が外れたのだ。

「先・生・・・？キス・し・・・て？」

恍惚の表情を浮かべた瑞希が ねだった。息が出来ない程に激しく口づけをし、指は溢れている蜜壺に滑り込ませた。

・くっ・

締め付けてくる熱い壺を押し広げるように壁をひっ搔く。

「あ・ん・・もう・だ・」

いきそうになつた瑞希の中からすーっと指を引き抜く。

困つたように潤んだ瞳が物欲しそうに九条を見つめる。 駄目だ

よ。 もうちよつと我慢しようね？

九条が視線でそう伝えた。

火を付けられた瑞希の体は熱く沸き上がる欲情に溶ろけそうだ。

「せん・せ・い・ おね・・がい・」

九条は瑞希をベッドに手をつかせ四つ這いにした。 制服姿のままの瑞希の蜜壺に自分の欲望を挿入した。

この体勢は男の征服欲を刺激する。 ましてや、自分の腕の中には制服姿の彼女がいる。

「あ・ん・・はん・・ああ・」

瑞希の中が動くのも辛いほど絞まってくる。

九条も もう我慢の限界だった。

「瑞希緩めて?・・もう 限界・」

動きが烈しくなり、それと共に瑞希が昇りつめた。

瑞希に少し遅れて九条も果てた。

「ごめんね? 瑞希? 怒ってる?」

瑞希が動かないことを、拒否だと感じ急に不安になってしまった。

無理もない。 性急にアブノーマルな欲望を求めすぎた。

壊してしまつたのか?

「瑞希？」

「先生？ 私 変？」

「？」

瑞希の言っていることが判らない。

「凄く 感じちゃった。まだ 体を感じてる。」
赤い顔をして恥ずかしそうにベッドから色っぽい視線を送ってくる。

なんとという愛しい顔だ。 もう 駄目だ。

「瑞希？ イタリアンは明日にしよう。今は 瑞希を食べる」
九条はネクタイをスルツと外し、シャツのボタンを外した。

まだ 体を感じてると言う瑞希の制服を脱がせると、少しの刺激
で見る見る内に瑞希が感じだす。 視線が熱い。

「ん・はあ・あつ」

九条の愛撫を全身に受け 愛撫だけで瑞希は二度達した。

「瑞希？ どうした？ 感じすぎ・・・」

「だって・・・先生が意地悪なんだもん・・・」

愛しい顔で 愛しい声を上げる。

「そろそろ 俺も行くよ？」

とろとろになった瑞希の中に、はち切れんばかりに膨れ上がった
九条の物が飲み込まれていく。

・う・きつ・・・

「瑞希 もい少し力抜いて？」

きつすぎて動くのも辛いのだ。

「でき・な・い・・ああ・・ああ・」

今日の瑞希は これでもかと言つほどに九条を翻弄させる。熱い壺の中はつごめく

「瑞希？ 瑞希？」

意識を手放した瑞希はぐったりして横たわっている。

今日の瑞希は異常な程に激しく感じていた。身体中が性感帯になったかのように、触れる度に甘い声を上げた。

今日から生徒ではなく、妻になるこの子を一生守り抜かなければ・
・という強い決意が九条の心に刻まれた。

二人でシャワーを浴びたのは 二時間たった後だった。

九条も瑞希を抱いたまま眠ってしまった。九条にとつても昨夜は余り眠れない夜だったのだ。

「瑞希 さつきは凄かったね？」

瑞希を抱いたまま湯船に遣っていた九条が 不思議そうに尋ねた。

「だって・・・」

うつ向いて真っ赤になった瑞希は 少し怒ってるみたいに見えた。

「？」

「どうした？ 怒ってる？ ヤッパリ制服のままだから？」

瑞希は首を横に振る。

「じゃあ なに？言つて？」

「だって・・・」

すねた様な瑞希も可愛い。

「先生が他の女の子に優しくするから・・・」

消え入りそうな声で不満を口にすると、ブクブクと湯の中に沈みこんだ。

「？ ？何のことだ？」

九条には何が何だか判らなかつた。

湯の中の瑞希を上がらせ、腰の上に座らせた。自然と瑞希は光の腰を跨いで向かい合わせになり、光の腕が瑞希の腰を抱いていた。

「瑞希？どういふことなんだ？ん？」

「だって・・・先生・学校じゃ私にだってあんなに優しい顔で笑ってくれたことなんてないのに・・・」

他の女の子にカツコいいところ見せちゃ・・・いや・・・」

真っ赤になつて手で顔を隠した。

卒業式の後 九条は女子生徒に今まで見せなかつた優しい笑顔を
見せ、何人かの生徒と腕を組んで写真を撮っていた。

瑞希の初めての嫉妬だ。

「瑞希 焼きもちを妬いてくれたんだな？」

初めて自分の心の苛立ちに戸惑っている瑞希は 九条に言われて、
この気持ちに嫉妬だと気付いた。

「えっ？ 妬きもち？」

「気付いていなかったのか？ ん？」

「だって、嫌だつたんだもん。」

こんなに愛らしい顔をするようになった。自分の手で 花を開か

せたいと思っていた少女。

大輪の百合の様に凜とした美しい花。

いつまでも 幸せな花が咲けるように守ってあげる。

「嬉しいよ。だからあんなに乱れたんだ？ だったら もっと嫉

妬して？ 瑞希の乱れた姿 見たいから」

意地悪く口元がニヤリと歪む。

瑞希の体をバスタブに腰掛けさせ、九条の舌がピンク色をした花弁を刺激する。トロトロと溢れだす蜜を吸い舌先を入り口に押し込む。

膝を閉じようとする瑞希の足をエム字に開かせ瑞希の体は浴室の壁に持たれさせた。

執拗に、中心を掻き回され瑞希はまたエロスの波の中に吞まれていった。

第二十一話 旅立ち（前書き）

瑞希と光の愛の話はこの話で一応最終回となります。

第二十一話 旅立ち

九条光と青木瑞希が入籍したと言う噂は、あっと言う間に学園中に広がった。

瑞希は予想通りK大に合格し、九条瑞希として入学手続きを済ませた。

入学式には、両親と九条が付き添う。

卒業式の日

夕方まで九条の部屋で愛を確かめあっていた二人は、ペコペコのお腹を抱えて青木家に帰った。

瑞希の両親と兄が瑞希の帰りを今か今かと待っているのだ。

「瑞希、おかえり〜」

緋呂が九条を睨み、瑞希を抱き締めた。

（今日ぐらい早く返せよ！明日からはずっと一緒に居られるだろうが？）

九条の腕から瑞希を引き離して睨みつけた。

（おいおい 俺達の結婚を真っ先に認めてくれたのはお前だろう？）

（それとこれは違うの！今更だけど、こんなに可愛い瑞希を渡すのが惜しいんだよ！）

視線でバチバチと喧嘩が始まった。

「もう玄関でなにやってるの？ 早くお食事にしましょう？」
お母さんが 瑞希をの背中を押してリビングに連れていった。

残された緋呂と九条は先程の剣呑とした雰囲気は姿を消し、お互いニヤリと笑って握り拳を腹に見舞った。勿論 力は入っていない。
「瑞希を頼むぞ！」

「ああ もちろんだよ。誰にも渡さないし、お前にも返さないから
瑞希の卒業のお祝いの席で、二人の婚姻届にお互いのサインをした。
た。

明日から瑞希は九条瑞希となる。

九条は明日から青木病院で研修に入るのだ。
いくら、医学部時代に技量を認められていると云えど、臨床の経験が皆無なのだ。普通なら、二・三年研修医で経験を積まなければいけない。九条は医学の世界では、瑞希と同じ新入生なのだ。

その日 九条は瑞希を残して自分のマンションに帰っていった。
瑞希が独身最後の日を両親と水入らずで過ごすために。まだまだ幼い十八歳の少女を譲り受けるのだ。御両親の心の内を考えると 申し訳なく思う。

お父さんの言うように大学を卒業してからでも良かったのかも？
と 考えてみたが、九条はその考えを打ち消した。

・・・俺が我慢出来なくなる。手中に納めておかないと。大学に入ると俺の目の届かない事だらけだ。これから、どんなヤカラが瑞希に近付いて来るか判ったもんじゃない！・・・

単なる独占欲

九条は自分の執拗さに苦笑してしまった。

翌日 九条は青木家に瑞希を迎えに行き、その足で市役所に婚姻届を出した。これで晴れて 光と瑞希は夫婦となったのだ。

「瑞希 末永く宜しくね！」

「光さん 幸せになろうね！」

九条は瑞希をマンションに送り届けて、慌ただしく青木病院に出勤した。

「先生 お仕事頑張ってたね？」

玄関でついはむ様なキスをすると、離れたくなくなってくる。思わず瑞希の腰を引き寄せ 深い口づけを交した。

「ん・先生ダメ・初日から遅れちゃうよ？私が笑われるから・・・」

名残惜しそうに瑞希の体を離して 光は出勤していった。

瑞希は今日届くことになっている自分の荷物を待ちながらキッチンの冷蔵庫の中を覗いた。

案の定 ビールと牛乳 ペットボトルのお茶の他に、チーズとベイクンぐらいしか入っていない。

先生は今日は早く帰るといつていたから、お買い物にでも行ってこよう。

メニューを考えながら食材のメモを取った。

そんなことを考えていると、お母さんと緋呂兄さんが荷物を持って訪ねて来てくれた。

「この部屋に入るのは何年ぶりかな？」

緋呂が二個スーツケースを持って玄関で感慨深く浸っていた。

「緋呂 早く入って頂戴。まだ荷物有るんだから！」

後ろからお母さんが 苛立っていた。

「ハイハイ。母さんはせっかちなんだよ！」

取り合えずの荷物は寝室とリビングに運ばれた。

先生は瑞希の為に、クローゼットを空けてくれていた。それ以外にチェストとドレッサーも。

「二人で住むには少し手狭だわね？」

片付けながら、母が呟いた。

「先生も考えてるみたい？」九条は水澤の家を出たが 彼の両親の位牌や仏壇は未だ京都の水澤にあった。光がいずれは水澤にも戻った時の為に長谷川が供養してしてくれた。光自身は水澤の家には三回忌に訪れただけだったが。

いずれは水澤の家に住むことになるのか、それとも別の家を探すのか？瑞希には見当も着かない。

けれど、何処にいようと何をしようと光に付いて行こうと決めた

のは瑞希自身だ。

先生は、苦勞を掛けるかも知れないと悩んでいたが、自ら選んだ人と一緒にする苦勞ならそれすら楽しいのかも知れない。

* * * * *

九条が青木病院に研修に入って三週間が過ぎた頃 光は院長室に呼ばれた。 今年の桜の花は暖かい日が続いた為 もう見頃となっていた。このぶんでは瑞希の入学式には散りかけているかも知れない。

「唐突だが光君 アメリカに行ってみる気はないかい？」青木院長は、他愛のない話を暫くしたあと、唐突にその話を切り出した。

「ポストンの大学病院から研修医の要請があつた。心臓外科のアドムス教授が直々に電話をくれてね。 緋呂でもいいんだが、あいつの専門は消化器外科だからな。 こんな機会は滅多に有るものでもないだろう？ どうだろう？ 考えてみてくれないか？」

九条は降つて湧いた幸運に血圧が上がってしまいそうだった。 アダムス教授は九条が医学部時代に一度 講義を受けた事がある。 九条の母校とポストンのその大学は 以前から交流が盛んだったからだ。

その頃はいつかはアダムス教授の元で学びたいと思っていたものだ。

幸運だ！・・・しかし、今の自分はこの頃の自分ではない。それに、瑞希と離れることなど考えられないのだ。

「ただいま」戸惑いを隠したまま瑞希が待つているドアを開けた。「おかえりなさい。お疲れ様です。」瑞希の笑顔が九条の苦悩を払拭させる。

やはり、この子と離れることなど有り得ない。アメリカ行きは断わろう。

瑞希の腰を抱き締め ついばむ様にキスをしながら九条は決心していた。

「光さん 先にお風呂に入る？」

「エツ？」いつもの瑞希ではない。

「今日はご馳走を作ったの。だから先にお風呂に入ってゆっくりした方がいいかな？つて」「ニコツと天使のような笑みを投げ掛けてきた。

「今日は何か有ったっけ？俺 記念日忘れてる？」何だ？付き合いだした日か？初キッスか？誕生日でもないし？何だ？

鞆と上着を無理やら取られて、浴室においやられた。クウエツシヨンマークだらけの頭を洗い湯船に入ると、いつもと違う匂いがした。薔薇の香りだ。

ああ いい匂い！

そう言えば、さつき抱いた瑞希の髪からも同じ香りがしたな。

もしかしたら、瑞希は既に風呂に入っていたのかも知れない。あつけど 普段着のワンピースを着てエプロンをしていたよな？

疑問符だらけの頭で 浴室から出ると、新しい下着とパジャマが用意されていた。

バスタオルで髪を拭きながら、上半身裸でリビングに戻ると、テーブルには美味しそうな料理が並んでいた。

そして何より

ヤバイ・・・鼻血が出そうだ

瑞希は白いフリルのエプロンを着けていたが その下は・・・

ゴクッ

「み・ず・・・き・・・それ？」

俺の下半身は一気に天に登っている。

「エへへ 結花ちゃんからのお祝いなの。変？」

ぶんぶんと首を横に振った。呆気に取られている俺をしりめに瑞希は話をしていた。

「今日 お昼に結花ちゃんと涼ちゃんがお祝いにきてくれて、これ をくれたの。」

「瑞希中は下着だけなのか？」どうにか声を出したが、明らかに 上擦っている。

「へっ？ 先生違うよ。服着てるってホラ」

エプロンをチラッとめくる。

ヤバイ

確かに ピンクのチューブトップと白いホットパンツが見えた。しかし、これは・・・

あいつら俺を煽ってるんだな。きつと。

瑞希のことだから何も考えてないだろう。そんな言葉すらしらない

はずだ。多分 今夜にでもこれを着て先生を迎えてあげてね。とか
言ったんだらう。絶対また明日 あいつら来るぞ！

「瑞希すごく可愛い。 だけど、俺以外に見せちゃ駄目だからね。
」そう言っつて瑞希の唇に自分の唇を重ねた。

もちろん、右手は胸のふくらみを揉んでいる。見る見る内に瑞希
の白い肌が桜色にそまってきた。

「瑞希 メチャクチャエロい」耳元で囁くと、ブルッと瑞希の体
が光の腕の中で震えた。

「光さん駄目 冷めちゃうから・・・ 後で」珍しく九条をなだ
めてテーブルに着かす。

おかしい？いつもの瑞希ならもうトロトロなのに・・・

九条は下半身の獣を押さえ込み、瑞希の作ったビーフシチューを
味わっていた。

「美味しい！」

瑞希の料理の腕は日々上達している。ほんの少し前迄は、家事な
ど全く知らないお嬢様だったのに。 九条が仕事にいつている間に、
母親に習っているのだらう。何にでも真面目に一生懸命取り組む彼
女の事だから、直ぐに上達すると思っていたが・・・

このシチューは美味しい。生ハムのサラダもドレッシングは手作り
みたいだ。

「ほんと？ 良かった！先生の口に合っつて嬉しい」

本心は、溶ろける様な笑みを浮かべた瑞希の方を食べたいんだか・・・

「昼から煮込んでいたのよ！」嬉しそうに柔らかくなった肉を自分も口に入れる。ソースが唇の端についてしまった。ペロツと舌で舐めた仕草は、堪らないくらい妖艶だ。

「光さん？何か話有るんじゃないですか？」不意に瑞希が口にした。

まさか？

院長に聞いた話を瑞希は知ってるのか？

青木の母から聞いたのか？

ゴクツと九条の喉が鳴った。

「何の事かな？」かすれた声が出ていた。

「アメリカに行ってきた下さい。光さんの夢でしょう？」穏やかな光を讃えて瑞希がはなしている。

「お母様に聞いたのか？」少し苛ついた声が光から返された。

「ウウン。今日結花ちゃんと涼ちゃんを送って行ったついでに病院に寄ったの。先生の白衣姿見たくて。」

看護師さんに院長に呼ばれたって聞いたから、院長室に行ったら聞こえちゃった。「段々涙声になってゆく瑞希がいじらしい。」

九条は瑞希の頭を抱き締めていた。

「行かないよ。瑞希の側に居るから。」

髪の毛にキスをして頭を撫でた。

「・・・ダメ・・・行かないと駄目。私 大丈夫だから。」いつもは九条の決めた事に素直に従う瑞希が 珍しく反対する。

「瑞希は俺と離れても寂しくないのか？少なくとも一年は帰ってこないんだぞ？ それでも良いのか？ 俺は嫌だ。 瑞希と離れ離れになるんなら何もかも捨てる。」瑞希の腕がギュウつと光の腰を抱き締めた。そして、大きく息を吸って決意を込めた言葉を発した。

「私も 離れたくない。だから・・・一緒にアメリカに行きます。」

「エッ？」
考えもつかなかった。そうだ。瑞希と一緒にアメリカに行けばいいのだ。

しかし、瑞希は目指していた大学に合格し、まだ入学もしていないのだ。たとえ夫と言えど瑞希の夢を奪っていいはずはない。
行くなら俺一人だ

いや 駄目だ 瑞希と離れて暮らすなどとは
考えられない もう 無理なのだ
耐えられない 俺が

「先生？ 私 大学は休学してアメリカのボストンに留学しようって考えてるの。 そうすれば、先生と一緒に行って足手まといにならないでしょ？」

留学って一度してみたかったし、大学に入ったら半年か一年ぐらい留学すれば良いってお母さんも言ってたんだから。 本当は高校の時 イギリスに留学する話があったんだけどお父さんが猛反対

して没になっちゃったの。危ないからって。

だから、先生と一緒にならお父さんも了承してくれるでしょ？

へへへ」

瑞希は光を見上げながら照れたようにへへへと笑った。

この子は俺の重荷にならないように自分も楽しもうとしている。俺が負担に思わないように たった十八歳の少女が十歳も上の俺を思い遣ってくれる

「ありがとう そうだね。 瑞希と一緒にアメリカに行けば良いんだ どうしてこんな簡単な事がわからなかったんだらう？」

瑞希 本当にありがとう 愛してる「瑞希の頭を抱き締めながらキスを落とした。

「瑞希 そのエプロンも 勿論もって行こうな？」ニヤリと光の瞳が妖しく輝いた。

????

「あいつらの期待に添えないとな？ 明日も会うんだろ？ん？」
期待？何の？ 結花ちゃんは、明日も3時に来るって言ってたけど？

何だろう？

「では、そろそろデザートを頂きましたらうか？」先生の瞳が光り、瑞希の体は後ろから羽交い締めにされた。

九条の手がエプロンの中に入り、器用にチューブトップとホットパンツを脱がしていく。勿論エプロンは外さずに。

ブラのストトラップが見えないように肩紐を取り外していたため、フォックを外すと瑞希の体には白いフリルのエプロンだけになってしまった。

「先生 何これ？」

ニヤニヤしながら九条は少し離れて瑞希の姿を眺めている。

「うーん いい眺め」 ひとりで満喫している。

瑞希は恥ずかしさで身体中真っ赤になってしまった。

明るい光の中で、自分だけが裸で立たされている。幾等 エプロンで隠していると言え恥ずかしさは既に沸点を越えている。

「これが裸エプロンだよ。男の願望の一つ」

「え」

「明日の朝は その姿で食事を作ること。いいね。」こんなときは学校での 冷血感の先生に戻ってる。

うっそーやだー

その後 エプロン姿の瑞希は光の舌と指と九条自身によって翻弄され、キッチンで何度も絶頂を迎えた。ベッドまで運ばれた 瑞希が意識を手放す迄 光の欲求は途切れる事がなかった。

意識を手放す迄 光の欲求は途切れる事がなかった。

第二十一話 旅立ち（後書き）

長い間気長に読んで頂きありがとうございました。瑞希と光の愛の生活を今度はアメリカを舞台に書きたいと思います。

続編も愛読して頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332b/>

超えてはいけない境界線

2010年10月20日15時12分発行